

無核ノ付き形のピッチアクセント方言への継承¹

Inherited unaccented genitives in Japanese pitch accent dialects

児玉 望

KODAMA Nozomi

1. はじめに

己の不明を恥じなければならぬが、児玉(2018)で『全国方言資料』の談話音声資料の分析に基づいて論じた二つの方言のうち、山形県大鳥方言については、現地調査に基づく詳細な報告が上野善道(1993)にあることを、恩師上野先生からのご指摘で知った。この方言の類別体系の統合が、周辺の外輪体系とほぼ同じ 1・2/3/4・5 であるとするこの調査の結論については、さらに遡って上野(1983)で発表されており、この結論に至った調査の内容のうち、体言データに関してまとめられたものが上野(1993)である。調査地点は 8 地点で、このうち 4 地点については 1~3 音節の体言について網羅的なデータがある。分析結果は以下のようなになる。

(1) 上野(1993:pp166-167)による大鳥方言体系の分析

	単独形	一般助詞付き	ノ付き	カラ付き
柄 0	ML~MM~LL	ML~MM~LL	ML~MM~LL	MLL~MML~LLL
絵 1,1'	MH~HH~LH	LH~HL	LH~HL	LHL
風 0	ML~LL	MLL~MML~LLL	MLL~MML~LLL	MLLL~MMLL~LLLL
犬 2'	LH	LLH~LFH	MLL~MML~LLL	LLHL
舟 2	LH	LHL	LHL	LHLL
箸 1	HL	HLL	HLL	HLLL
魚 0	MLL~MML~LLL	MLLL~MMLL~LLLL	MLLL など	MLLL など
頭 3'	LLH~MLH~LLF	LLLH~MLLH~MMLH	MLLL など	LLLHL など
心 3	LLH~MLH~LLF	LLHL~MLHL~LFHL	LHLL(ママ) など	LLHLL

¹ 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 15K02484) の助成を受けたものである。

兎 2	LHL	LHLL	LHLL	LHLLL
兜 1	HLL~HHL	HLLL~HHLL	HLLL~HHLL	HLLLL など

この分析では、H,M,L,Fの記号が用いられている。「など」は、原則として左欄の変異形に対応する語形を略記しているが、「頭」のノ付き形については上段の「魚」類と同じ変異形であることを、「心」のノ付き形は、左欄と同じものを表しているとみられる。

H,M,Lは、「高」「中」「低」の段階表記であり、上昇対非上昇の対立を仮定した拙論の分析と異なって見えるが、HとMの区別が、拙論が上昇・非上昇として区別したものに相当し、また、LHの連続ではLの音節内部で上昇が開始されているとみれば、拙論の分析とよく似ている。

(2) R*つまり「上昇開始昇り核」解釈に基づく置換

- a. 語頭の H → R*
- b. LH → R*H (LからHへ向けての上昇)

(3) (2)の(1)への適用結果

	単独形	一般助詞付き	ノ付き	カラ付き
柄 0	ML~MM~LL	ML~MM~LL	ML~MM~LL	MLL~MML~LLL
絵 1,1'	R*~RH*	R*H~R*L	R*H~R*L	R*HL
風 0	ML~LL	MLL~MML~LLL	MLL~MML~LLL	MLLL~MMLL~LLLL
犬 2'	(同下)	LR*H~LFH	MLL~MML~LLL	LR*HL
舟 2	R*H	R*HL	R*HL	R*HLL
箸 1	R*L	R*LL	R*LL	R*LLL
魚 0	MLL~MML~LLL	MLLL~MMLL~LLLL	(同左)	MLLLL など
頭 3'	(同下)	LLR*H~MLR*H~MMR*H	(同上)	LLR*HL など
心 3	LR*H~MR*H~LLF	LR*HL~MR*HL~LFHL	(同左)	LR*HLL
兎 2	R*HL	R*HLL	(同左)	R*HLLL
兜 1	R*LL~R*HL	R*LLL~R*HLL	(同左)	R*LLLL など

(3)で問題となるのは「降」とされるFの解釈である。(1)でFはすべてLFの連続で用い

られているが、これが L の高さからの下降であり、L より低い「段階」を表記しているのか、一旦 H まで上昇してからの下降(L[F])という曲調を表しているのかが不明である。語頭の LF(H)は、前者であれば、ML の低い実現形と解釈することで、MR*と同一視できそうである。一方、「頭」と「心」の語末 F は、語末 H をもつ交替形が語末下降調をとる実現形、というようにも見える。このように、F に分裂した解釈を適用すれば、(1)が分析の対象としている実現形のうち 2 音節語と 1 部の 3 音節語が、限られた談話音声資料に基づく拙論でもカバーできていると言ってよいと思われる。

分析の違いは、(1)が H からの下降の位置の違いに基づいて「舟」:「箸」、「兎」:「兜」を別の類としているのに対し、拙論では語頭の H と LH の 2 音節にわたる上昇をともに語頭上昇核とし、下降位置を型の弁別には非関与、としている点である。また、拙論では語頭音節に上昇がない音形の 2 音節語を、語末核の LR*、つまり、「犬」類に分析しているが、(1)では「犬」類に接続する一般助詞は H となっているので、拙論で LR*としたもののうち、助詞に下降の聞かれている「あが (<赤?)」「姉」「粉」は「舟」類ということになる。これに関連して、(1)では、単独形で「犬」:「舟」、「頭」:「心」をそれぞれ LH、LLH と分析し、弁別がないとしているのに対し、拙論では、談話資料の性質上、単独形のデータがほとんどないにもかかわらず、LR*/R*H, LLR*/LR*H のような弁別の可能性があることを示唆した。これは、2 体系併用話者としての論者が、共通語形の「飴」RH~RR と、鹿児島方言形の「雨」LR を弁別する、という内省²を元に談話音声資料を観察した結果の分析である。勇み足である可能性はあるが、検証に値する問題であると信ずる。

拙論の中で、異音的实现を観察するために談話音声資料の分析が重要である、と大口を叩いた手前、調査票調査でもこれだけの異音的实现形が記録された論考を目にし、アクセント研究とはどうあるべきであるかを改めてご教示いただいたようで恥ずかしくもあるが、その一方で、短い談話音声資料でもじゅうぶんに吟味すれば綿密な調査票調査と比べてそれほど見当違いの結論には達していない、ということに意を強くした面もある。

特に、(1)の分析では、「犬」と「舟」、「頭」と「心」の型所属は付属語の接続形を見なければ判別できないが、本文中に「単独形を犠牲にしても一般助詞付き形を聞いていればかなりのことが分かったはずである」(上野 1993:167)とあるように、付属語の接続形が聞

² 同体系内の曲調の有無による弁別としては、現代の中高年層の鹿児島方言で用いられる終助詞を欠く疑問文「飴?RF」で、疑問文下降イントネーションの有無の弁別が、次末音節の上昇調の有無によって実現する、という内省例がある。鹿児島方言の A 型文節の末音節は、上昇調イントネーションが加わらない限り、下降調が無標である。(例:飴 HF) 共通語形の「雨」に近いのは疑問形 RF のほうである。

かれていないと思われる語が多い。アクセント資料の中で明示的に「犬」「頭」と同類の記号が付されているデータは、「犬」のほかは、「花」「蚤」「罰」「百」「男」など、少数の語に限られている。(1)で、一般助詞付き形の異音的实现形が(単独形の場合と同程度に)網羅されているといえるかどうかには疑問の余地があるだろう。談話資料の付属語接続形の分析にはやはりそれなりの意味があると考ええる。

付属語接続形も短い談話音声資料では何が出るかは制御できないのであるが、拙論で特に興味深いと考えるデータは、(1)で「風」類と同じアクセント形になると分析されている「犬」類のノ付き形の例が、「山」「かで」の2例出ている点である。拙論ではこれを、ノ付き形では語末核が消えて無核形で出ていると分析し、さらに、旧種市町中野方言の「米の」も無核形の音形で出ていることを示した。昇り核と降り核という体系の違いにも関わらず、下げ核の東京方言と同様の交替が見られることは、この交替がいずれかの段階の祖語に遡ることを示していると考ええる。

昇り核体系での交替としては、上野(1984:381f)に新潟県村上方言の興味深い記述がある。この方言は、2音節Hという句音調のため、2音節名詞が無核型であっても語末核型であっても、1音節助詞接続形がLHLというピッチ形で現れる。しかし、Hが「中」の「カマボコ型」とHが「高」の「トンガリ型」という、話者の意識の上でも弁別がある二つの音形があり、一般助詞付き形ではこの二つの音形が無核型と語末核型に対応するのに対し、ノ付き形では、語末核型が無核型と同じ音形になる類と、区別のある音形になる類に分かれる、とする。(1)の「犬」型と「舟」型は一般助詞付き形で区別がある点が異なるが、後半のノ付き形については似ている。上野(1984)では、ノ付き型の違いに関わらず村上方言の語末核型は共時的にはすべて同じアクセント素であると分析するものの、ノ付き形が無核型とならない語末核型は、通時的には語頭核型から核が一拍ずれを起こしてこの型に加わったものとして説明する。つまり、語末核型の名詞がもつ無核のノ付き形は、この一拍ずれ前の段階に成立して継承されている、という考え方である。

この考え方では、村上方言や大鳥・中野方言の語末核型に対応する、2-3類・3-4類名詞の語末核を欠くノ付き形が、どの段階でどのように発生したかを解く手がかりとして、これらの無核のノ付き形がどのように分布しているかが重要になってくる。『全国方言資料』の短い談話音声資料でもこの例を見出すことができるということを実証する、というのが、本稿の意図である。もちろん、この資料だけからは、そのような例が存在しない、という証明にはならないのであるが、「語末核型」や「無核型」が異なるピッチで実現する諸体系でそれぞれに共通して同じ無核のノ付き形が出ることを示せば、これらが継承形であるこ

とを示せると考える。

この問題に関連して、名義抄式体系の声点資料において 2-3 類(LL)・3-4 類(LLL)名詞のノ付き形が、それぞれ上昇を欠く LLL, LLLL という独特のピッチ形で表記されることをどう解釈するかは、日本語アクセント史の大きな問題となっている。この点を、ラムゼイ説に立たない研究者にとっての「一つの課題といえるかもしれない」とする平子達也(2012: 19-22)が簡潔にまとめている。ラムゼイ説のように声点資料の H と L の通説の解釈を逆転させる代わりに、「ピッチアクセント祖体系」を上げ核体系とし、名義抄式体系がその段階にとどまる体系の一つであると見る拙論では、ノの上昇を欠くことを名詞側の語末核が消える無核化とも解釈することができる。第 2 節では、「無核化したノ付き形」がピッチアクセント祖体系にまで遡りうるとしたら、どのような説明が可能かを、ピッチアクセント祖体系の前段階が語声調体系であり音節数の異なる語形変化形に系列性があったとする児玉(2017)の拙論に結び付け、この課題を解くことを試みる。

第 3 節では、『全国方言資料』の談話資料の中から、ピッチアクセント体系とみられる体系において、有核の名詞に対して無核化している分析できるノ付き形が出現する資料をいくつか選んで取り上げる。無核形の実現形、核が実現するピッチ形が共に、それぞれに異なると考えられる諸体系を、地域の隣接を考慮して選んだ。談話資料にみられる音声実現形の揺れに基づいて、無核形と核の実現とをそれぞれどう音韻解釈したかの仮説を提示し、その論拠となる『全国方言資料』の出現例を示す。逆に、ノ付き形に無核形と語末核形の両方が出現する体系の場合、これらの例がその体系での無核形と核の実現形との解釈を考える手がかりとなっている例もある。

2. ノ付き形の発生と継承の通時的解釈

名義抄が記録する院政期の京都方言においては、付属語がまだアクセントを担う単位としての自立性を保ったと考えられ、名詞承接の場合でも名詞のアクセント型に関わらず、高起（拙論では無核）の付属語には一貫して上声（通説で H）の声点が差されている。一方、現代中央式諸体系でも低起となる助詞モには、先行する語末の名詞が平声（通説で L）の場合に、(H からの) 下降調を表していたと推定される東声の声点が差されている例が多く、この点に関して議論を呼んできた。名義抄体系が上げ核体系であるとみる拙論の分析では、モが有核であり、東声の冒頭の H は、語末核とモの二つの核が連続した場合に先行する上げ核が実現していることと見、有核モも無核の助詞と同様に自立性を保っていたと考える。拙論では、本来核ではなく「低結式」の式の実現として現れた語末の低音節の後でもモに東声差される例（2-2 類など）があることを、名義抄体系のように無核語が H で開

始される音形をもつ体系において、上げ核体系から降り核体系への変化を俟たずに語末 L 音節が語末核としての性格を帯びはじめていたことを示すとする。

これに対して、ノ付き形は、無核の一般助詞付き形とも有核のモ付き形とも異なり、名詞の語類ごとに上声点または平声点が差される。これをまとめたのが(4)である。この分布を説明する前に、この体系から直接に派生したと考えるとよいとみられる現代京都方言で、この不規則なノ付き形がどのように継承されているかを、『京阪系アクセント辞典』の記述に基づいて(5)にまとめる。

(4) 名義抄体系 2 音節各類の 1 音節付属語接続形

	一般助詞付き形	ノ付き形	モ付き形
2-1 類「鳥」	上上-上	上上-上	上上-平
2-2 類「犬」	上平-上	上平-平	上平-東～平
2-3 類「村」	平平*-上	平平-平	平平*-東～上
2-4 類「舟」	平*上-上	平*上-平	平*上-平
2-5 類「鍋」	平*上-上	平*上-平	平*上-平

(5) 現代京都方言の 2 音節各類の 1 音節付属語接続形<中井幸比古(2002)に基づき作成>

	一般助詞付き形	連体ノ付き形	準体言ノ付き形
2-1 類「鳥」	HH(-)H	HH(-)H	HH-L
2-2 類「犬」	H*L(-)L	HHH~H*L(-)L	H*L-L~HH-L
2-3 類「村」	H*L(-)L	HHH~H*L(-)L	H*L-L~HH-L
2-4 類「舟」	L<H	L<H	LH-L
2-5 類「鍋」	LF*(-)L	LF*(-)L	LF*-L

一般助詞付き形については、この過程に関する文献資料もあり、(4)から(5)へアクセント変化による直接の継承があることが知られている。この変化とは、2-3 類名詞の高起化と、付属語の順接化である。(5)では、この順接化をアクセント単位としての統合とみて"(-)"の表記を用いている。拙論では、上げ核の降り核化を仮定し、2-4 類と 2-5 類の語頭降り核が低起式に変化し、この変化により語頭核がアキマとなった結果、降り核の 1 つ前の音節を下げ核とする再解釈が生じ、2-5 類の低結式の下降が語末核となった、と見る。核音節と解釈するものを、右側に"(*)"を付すことによって表記する、2-4 類の"L<H"は、低起無核型のさまざまな上昇曲線を表記する。

連体ノ付き形は、一般助詞付き形と基本的に合流している。この合流は、2-2 類と 2-5 類については、一般助詞付き形側の変化によると見られるので、本来(4)ですでに同じ音形

であった 2-1 類を合わせて 3 つの類の連体ノ付き形については(4)の継承であると考えられる。加えて、2-2 類と 2-3 類に交替形として高起無核の 2-1 類と同じ、HHH をもつ語が多い。一方、京都方言では、準体助詞としてのノが、低起助詞としてアクセントの自立性を維持したモ付き形と平行的な、低起助詞としての音形で現れる。さらに、2-2 類と 2-3 類の準体言ノ付き形は、2-1 類と同じ、無核の交替形をもっている。

(4)から(5)への継承であるか、あるいは類推によって形成された改新形かが問題になるのは、以下の 3 点にまとめられる。

(6) A. 2-3 類の HHH が平平-平からの継承であるとするばどんなアクセント変化か。(この場合、HHH と交替する H*L(-)L は一般助詞付き形からの類推による改新形と見ることになる。)

B. 2-2 類の上平-平が H*L(-)L にそのまま継承されたなら、HHH は改新形として新たに生じた交替形と見なければならぬが、この改新をどのように説明すべきか。

C. 2-4 類の L<H が平上-平の継承形であるとするば、同じ平上-平表記でも 2-4 類と 2-5 類は異なる音形であったと考えなければならぬ。あるいは、平上-平を継承するのは準体言ノ付き形の LH-L であり、L<H は一般助詞付き形からの類推による改新形と見るべきであるか。

A の問題について説明しなければならないのは、(4)では HHH と LLL として保たれている弁別が、(5)でなくなるのはなぜか、という点である。金田一春彦(2005c)は、この問題について、LL-L が継承形としての HH-L を経て、『補忘記』に記録されている室町時代の頃までに 2-1 類からの類推による改新が生じていた、とする。一方、B の問題については、2-2 類が 2-3 類に合流した結果、数の多い 2-3 類への類推が働いて HH-H が規則的な HL-L に付け加わった、とする。これらの HHH 形をいずれも類推変化として説明する立論である。

これに対して、(4)で 2-3 類に L の表記が用いられているのは、LLL がノに核を持つ LLL* だったからではないか、というのが拙論の上げ核体系説からの A の問題への解答である。3-4 類のピッチ形である LLL*をそのまま継承すれば、HH*L となるはずであるが、この音形は、(5)では、準体言ノ付き形の交替形として現れている。準体言ノ付き形と連体ノ付き形の違いが、前者に他の付属語が接続しうるのに対し、後者のノは常に文節末音節を構成する、ということであるという点を考慮すれば、核が後続音節のピッチ形として実現する上げ核体系においては文節末の核は脱落しやすく、その結果、LLL が無核の単位として HHH との弁別を失った、と考えられないだろうか。拙論では名義抄式の段階ではまだ高起

と低起の式の区別はなく、語頭の L は語末までに上げ核があり、上昇があることを示すと考える。

C の問題は、3 音節名詞で現代京都では低起無核 (L<H) となる 3-6 類と同じ「平上-上」の声点が(4)の 2-4 類のノ付き形になぜ用いられていないのか、というように言い換えてもよい。一般助詞付き形を含め、2-4 類と 2-5 類が名義抄の声点資料では (2-5 類の第 2 音節に東声点が付される場合があるのを除き) ほとんど区別されない、という問題は、この 2 類の分裂が比較的新しいことを示すのではないか、という根強い説³の根拠となってきた。しかし、外輪体系の出雲から、四国・富山にまで及ぶこれら 2 類の (共通した) 分裂が平安朝期以降に生じたとは考えにくい。一般助詞付き形の「平上-上」で川上 蓁(1965)が論じたような、上声点と平声点では書き分けられないような区別が「平上-平」にもあり、2-4 類の方の「平上-平」では「平上-上」に合流して継承された、というのが一つの説明である。こちらを C 第 1 案とする。

C に対するもう一つの説明は、そもそもなぜノ付き形が他の助詞と異なる振る舞いをするのか、という問題に関わる。こちらを C 第 2 案とする。すでに述べたように、名義抄期までは他の助詞がアクセント単位としての自立性を保っていたことが知られている。これに対して、ノは先行してアクセント単位としての自立性を失っており、ノ付き形文節全体として名義抄体系以前に成立したピッチ形を継承している、という方向で考えてみる。一方で、現代京都方言の準体言ノ付き形が、低接助詞としてモと同じ自立性を保っていることを考慮すると、平安朝期にも、ノ付き形は、文節統合形と助詞自立形が併用されており、声点資料に表れているのは、2-1 類と 2-3 類では文節統合形、他の 3 類では低起 (有核) 助詞自立形だけである、というものである。声点資料に揺れが見られなかったら、平安朝期には類ごとにどちらが用いられやすいかが異なっていたことを反映するものだろう。

では、文節統合形は、いつどのようにして成立したものだろうか。拙論では、上げ核体系としてピッチアクセント祖体系を仮定し、それに先行する段階は語声調体系だったとした。これは、平安朝期まで維持されていたとみられる動詞活用の系列性、つまり、同じ動詞であれば、活用形の音節数の違いに関わらずどの型に所属するかが予測可能な分布となっていることに基づく仮説である。名詞とそのノ付き文節統合形にも、それと類似する系列性が観察されるのである。

(7) 名義抄式体系の名詞ノ付き文節統合形の「系列」関係

³ 早田輝洋(2017)で展開されている説は、平子(2012)での紹介とほぼ同じであり 2-4/5 類の分裂を想定するものである。

2-1 類「鳥」	HH	HHH =3-1 類	
2-2 類「犬」	HL	HLL =3-3 類	cf. 3-2 類 HHL(*)
2-3 類「村」	LL*	LLL(*) =3-4 類	
2-4 類「舟」	L*H	L*H(H) =3-6 類?	cf. 3-5a 類 LL*H > HLL
2-5 類「鍋」	L*F	L*HL =3-7 類	cf. 3-5b 類 LL*H] > HLL

2-1 類に対する 3 音節系列として 3-1 類、2-3 類に対して 3-4 類となるのは、動詞の場合と同じである。2-4/5 類に対応する動詞形の系列は 3-5a/b 類の音形であるが、C 第 1 案では(7)ではノ付き形が 3-6/7 類となっている。この違いは、語声調体系の 4 つの上昇調系列がピッチアクセント祖体系では 2 音節で 2-4/5 類に統合するに際し、動詞とノ付き形でそれぞれ異なる側の 3 音節系列に統合した、と見ることで一応の説明はできる。この系列に合わないのが 2-2 類に対する 3-3 類であるが、実はこのズレが名義抄以前の段階を推定する大きな手掛かりになっているように思われる。

これに対して、C 第 2 案では、(7)が成り立つのは 2-1 類と 2-3 類だけで、他の 3 類では、語声調体系から位置アクセント体系への移行に伴う「系列性」の崩壊により、助詞自立形だけが残った、と見ることになる。

上記(6)の B で述べたように、(4)からは(5)の 2-2 類の HHH は導かれぬ。従って、B の解答は、この間でなんらかの類推的改新が起きたとすれば、金田一(2005c)と同じく 2-2 類が統合した 2-3 類のノ付き形からの類推で生じたのが HHH の 2-2 類ノ付き形だと説明することになるだろう。3-4 類(オトコなど)と統合した 3-2 類(アズキなど)の無核ノ付き形についても同様の説明が可能である。

中井(2002:44)は、近畿中央部では、次末核をもつ高起式名詞のノ付き形の「平板化」(無核化)が義務的ではなく、これを、近畿中央部で進行した「昇核現象」、つまり、無核ノ付き形を継承する HH*L が、これを継承しない H*LL と合流したことに結び付け、この結果、この平板化が「(ほぼ日常よく使う語に限って) 任意の規則として残存している」とする。

類推による改新とは、不規則動詞形が規則動詞形に置き換わる場合のように、語彙ごとに進行すると考えられる。有核名詞の無核ノ付き形が「不規則形」であるとするならば、これを本来持たなかった名詞が不規則形をもつようになる変化は異例に見えるが、「類推」はモデルがあればどちらの方向へも可能であるから、現在の近畿中央部の状況は、このような類推変化によって一応の説明が可能である。

近畿以外の方言の無核ノ付き形が、名義抄式の(7)のような体系から類推によって獲得された改新形であるとするならば、特に 2-2 類や 3-2 類について、近畿中央部と同様の、「任意の

平板化」となることが期待される。しかし、(1)の大鳥方言の記述にみられるように、類全体としての無核ノ付き形の存在が報告されていることは、(7)を祖形とすることに無理があることを示しているように思われる。

無核ノ付き形が類推変化による改新形だとすれば、2-2 類や 3-2 類の名詞がそもそも無核型となっている外輪式体系については規則形への改新といえるが、内輪・中輪式では、有核の 2-2 類や 3-2 類の名詞の大多数が、不規則な無核形を類推によって獲得したと考えなければならぬ。

たとえば、東京方言の語末核型の名詞にも無核ノ付き形を持たないものがある。しかし、これらはそれぞれに理由が推定できるものが多い。数詞の「一」「六」「八」「百」はいずれも漢語名詞である。「次」「よそ」は、上野(1993)で外輪体系である大鳥方言で無核にならない 2-2 類名詞として挙げられており、また、上野(1983)によれば村上方言においても語末核型となっていることからみても、東日本では 2-2 類として継承された名詞ではない可能性が強い。3-2 類の「ふたり」や「ふたつ」は、副詞的な用法では無核であり、ノ付き形の語末核は、「またの」「二度の」「聞いての」のように、無核の連用語に格助詞が接続する場合の語末核付与を経た「ふたりの」「ふたつの」だけが残存していると考えられる。このような例外を除くと、語末核型名詞として継承されたほとんどの 2-2 類・3-2 類名詞が無核ノ付き形をもっている。東京方言でも(5)の京都方言にも似た、不規則形である無核ノ付き形の規則的な有核ノ付き形との交替はあるが、このような交替が可能なのは、名詞が修飾句を伴い、ノが名詞句全体に付加されている構造に限るように思われる。単独で表れた語末核名詞の、いわば語形変化としてのノ付き形は、2-2/3 類・3-2/4 類を問わず無核形ではないだろうか。

- | | |
|-------------------|------------|
| (8) a. コノハシノマンナカデ | 「この橋の真ん中で」 |
| b. コノハシ]ノ マンナカデ | 「この橋の真ん中で」 |
| c. ハシノマンナカデ | 「橋の真ん中で」 |
| d. ?? ハシ]ノマンナカデ | 「橋の真ん中で」 |

このような事実を見る限り、類推による改新語形よりは、継承された語形として無核ノ付き形を説明したほうがよい。(7)に先行する段階として、2-2 類にもこれに対応する 3 音節の系列のノ付き形があった、としたらどうだろうか。

(9) 名義抄式体系以前の 2 音節名詞ノ付き文節統合形の「系列」関係

- | | | |
|----------|----|------------|
| 2-1 類「鳥」 | HH | HHH =3-1 類 |
| 2-2 類「犬」 | HL | HHL =3-2 類 |

2-3 類「村」 LL* LLL(*)=3-4 類

3-2 類は、外輪式体系では 3-1 類と、内輪・中輪式では 3-4 類と統合するので、この語形であればいずれも無核ノ付き形が規則的な継承形となる。

この仮説が正しいとすれば、無核ノ付き形は(9)の段階を経たすべてのピッチアクセント方言に継承された語形である、ということになる。これに対して、(9)からさらに(4)への変化を経た体系では、2-2 類の名詞の無核ノ付き形は、先行段階の残存形であるが、あるいは、2-2 類が 2-3 類と合流した「降り核化」を経た方言では、2-3 類からの類推による改新形だということになる。このような違いは、おそらく無核ノ付き形の継承の仕方に違いを生むだろう。

『全国方言資料』の談話音声資料から無核ノ付き形が東北から九州に至る広範な地点で観察されることを示すことは、この語形が(9)の継承形であることを確かめるためにまず必要である。加えて、無核ノ付き形が継承されていると考えられる語について、どれだけ規則的な有核形が観察されるかも、重要な点になると思われる。たとえば、東京方言の談話音声資料から(8)d のような語末核型名詞の有核ノ付き形が、語単独で出現する例が見つかる確率はかなり低いだろう。これらの無核化しない語形の出現例のある方言では、(4)の名義抄式の 2-2 類のような無核化形が規則形に置き換わる改新を経ている可能性がある、ということになる。

このほかに、型の統合などアクセント変化が無核化ノ付き形の分布に影響を及ぼすことも考えられる。各体系について、地域ごとに拙論で想定されるアクセント変化をまとめた上で、談話音声資料でのノ付き形のアクセントの分布をあげていく。

3. 語末核（及び次末核）名詞のノ付き形

本節では、『全国方言資料』の談話音声資料にみられる語末核型名詞（中央式体系では高起次末核型名詞）のノ付きについて、無核化しているものしていないものを列挙し、そのように分析した根拠を説明する。

最初に、範囲を限定する。対象は、拙論(児玉 2017)で「位置アクセント祖体系」から分岐したとみられるもののうち、現在も位置アクセント体系であるとみることができると判断したものに限る。

位置アクセント祖体系を経た体系であるが現在は語声調体系になったと考えられる、隠岐の 3 型アクセントの 2 方言は除く。これらの体系ではノ付き形も一般助詞付き形も共に、名詞の系列を変えない体系に改新されている。広戸惇・大原孝道(1953)の先行研究にもノ付き形に関する言及はない。2-2/3 類とこれらのノ付き形の継承形に予想される 3-2/4 類は

系列が異なるので、不規則な残存系がある可能性もないわけではないが、『全国方言資料』に例が見られる可能性は低いと思われる。『全国方言資料』に資料のない福井の語声調体系についても、松倉昂平(2014)はノ付き形は一般助詞付き形と同様の振る舞いをするとして明記されている。

位置アクセント体系のうち、2-1 類と 2-3 類、3-1 類と 3-4 類が共に無核化している讃岐式と、共に有核化している加賀式についても、今回の調査対象から除く。語末核と無核の対立のない筑前式も同様である。

3.1. 中央式諸方言

CD-ROM 版のデータフォルダー名と収録地名の対応は、以下の通りである。

18_natasho	福井県遠敷郡名田庄村納田終（現大飯郡おおい町）
24_misugi	三重県一志郡美杉村川上（現津市）
24_hamajima	三重県志摩郡浜島町南張（現志摩市）
25_taga	滋賀県犬上郡多賀町萱原
25_kutsuki	滋賀県高島郡朽木村（現高島市）
26_kyoto	京都府京都市
27_osaka	大阪府大阪市
28_kanzaki	兵庫県神崎郡神崎町粟賀（現神河町）
29_tsuge	奈良県山辺郡都祁村（現奈良市）
30_ryujin	和歌山県日高郡龍神村大熊（現田辺市）
30_koza	和歌山県東牟婁郡古座町（現串本町）
36_nobuno	徳島県那賀郡延野村雄（現那賀町）
38_kawauchi	愛媛県温泉郡川内村井内（現東温市）

この区分に含まれるのは、語頭から核音節（無核型ではアクセント単位末、後続高起語があればその冒頭）までのピッチ曲線に、平進となるか、「低」のレベルからの上昇となるかの「式」の対立がある体系である。「核」は、次音節までのピッチ下降を実現する下げ核体系であるが、「低」のレベルに達すると平進に近づく。「核」の下降があれば、句内の次の語で上昇する目標となる「高」は最初の語の「高」より低くなる。ただし、後述するように、三重県浜島町方言と和歌山県古座方言の談話資料は、式と核の実現が若干異なる。

拙論では、核が上げ核から降り核に変わったあと、中央式では音形は変わらないまま、降り核が下げ核と再解釈されて核の位置が一つ前にずれたと見るので、名義抄式の語末核型名詞の継承形が 2-2/3 類、3-2/4 類の次末核型であると見る。

名義抄式を継承していると考えて無理のない近畿中央部を含め、福井県から高知県に及ぶ諸体系については、中井(2002)に各語の所属型や実現形についての詳細な記述がある。特に、「大阪アクセントの考察(1)~(2)」では、初期の大阪落語の SP 盤をはじめ、上記 27_osaka を含む談話音声資料に基づいて、近年の大阪アクセントの変化について分析している。ノ付き形の無核化もその分析の一つであり、初期の SP 盤の段階から無核化は義務的ではなく、話者によっては無核化しない語形の使用例が半数に上っていたり、頻出語で同じ話者が両形を用いている例があること、また、次末核型以外の有核語や低起有核の語の無核化の例があることが述べられている。

大阪の資料については重複になるので、中井(2002)の考察を考慮しつつ、主としてその他の周辺地域の例をあげていく。

本稿では、上記で概略を述べた 2-2/3 類をはじめとする高起語末核型名詞のほか、低起無核型の名詞の語末核をもつノ付き形のデータ例についても言及する。(4)の「平上-平」の解釈の問題とも関連する可能性があるからである。(8)では、低起無核型の名詞でノが低接する語を準体言ノ付き形としたが、データの中には連体修飾形でこのノ低接形が現れるものがある。代表的なのは、資料の性質上多くの談話資料に出現する「イ[マ]ノ(今の)」である。この音形については、中井(2002:66)にも注記があり、マに拍内下降がない、という点で 2-5 類とは異なるとしている。同じように、低起無核型の名詞にノが低接する例は、以下のようなものがある。

- (9) a. ナ[カ]ノ[ミワ] 「中の実は」 18_natasho p24
 b. ムカ[シ]ノ[ヨ]ニ 「昔のように」 30_koza p406

「今」と(9)a は、中井編(2002: 49)に『「中、外、今、後」など、空間・時間に関わる語から始まり」低起無核型 2 拍名詞が低起語末核型に変化する若年層の傾向についての言及があるが、「イ[マ]ノ(今の)」の出現例を見る限り、語末核が現れているのはノ付き形だけで、他の助詞が接続する場合には「イマ」は低起無核である場合が多い。(9)b も、中井(2002: 111)に、高起無核型と低起無核型(若年層)、低起次末核型(周辺部)が併記され、かつムカシノで語末核形があることが注記されている語である。談話音声資料では、この話者も「ムカチャー 昔は」では低起無核形を用いている。

「今」「昔」といった語は、副詞的用法の多い語であり、また、場所名詞も、話し言葉を中心に、助詞を伴わずに連用的に用いられやすい。上記の「大阪アクセントの考察(1)~(2)」では、数詞の副詞的用法が低起無核化することも大阪アクセントに起きた変化として分析の対象となっている。この例は、大阪以外のアクセント資料にも出る。

(10)]サンニン[オ]ルト サン[ニ]ンノ [ゾーリ

「三人いると三人の草履」 25_taga p124

副詞的用法で低起無核の語が、ノ付き形では有核形を取る、といった関係が認められれば、東京方言の無核副詞のノ付き形が語末核形をとることとの関連も問題となるだろう。その点を考慮し、副詞のノ付き形についても例を示す。

3.1.1. 福井県名田庄方言

- (11) a. オー[ケ]ニ]アナ[ア]ケテ 「桶に穴をあけて」 18_natasho p226
b. オーケノ[シ]リニ 「桶の底に」 18_natasho p226

「桶」は 2-5 類であり、低起有核型の名詞のノ付き形に無核形が出ている例である。高起次末核形で有核の例と無核の例は次の通り。

- (12) a. [メ]シノ フッ[カ]ケタ [ト]コエ 「飯のふきかけたところへ」 18_natasho p227
b. [ワクノタ]ンノ[テッ]ペカラ 「わくの谷の頂上から」 18_natasho p232
(13) a. [オンナノ]ク[セ]ニ 「女のくせに」 18_natasho p231
b. [イチニチノコッ]チャカイ 「一日のことだから」 18_natasho p238

副詞用法をもつ語のノ付き形は、無核で 1 例ある。

- (14)]イッポー[ノ]キーデ 「一本の木で」 18_natasho p222

3.1.2. 三重県美杉方言

- (15) [ム]ラノ[ヨ]ーニ [オモウ 「(上品な)村のように思う」 24_misugi p34
(16) a. [オナリノマワリモ セ]ンナーンデ
「炊事の支度もしなければならないので」 24_misugi p30
b. [ハシノシタノ]コン[ジ]グライ
「橋の下の乞食ぐらい」 24_misugi p34

「おなり 炊事」は、多賀方言の語形から次末核形と推定する。副詞用法をもつ語のノ付き形が 1 例あり、低起無核形である。中井(2002: 96)では、周辺部で名詞用法低起語末核、副詞用法無核とあるので、無核化が低起語に及んでいる例である。

- (17)]サッキノ[ハナシ]]ヤ 「さっきの話だ」 24_misugi p31

3.1.3. 滋賀県多賀方言

無核形の例のみ 2 例ある。

- (18) a. [コメノ]ワレ イッピョ[一]モ 「米の,あなた,一俵も」 25_taga p126
b. [ミセノヒ]トニ [キ]イテ[デ]モ 「店の人に聞いてでも」 25_taga p144

副詞的用法で、低起化しているが有核の 1 例。

(19) フ[タ]リフ[タ]リ 「二人ずつ」 25_taga p129

3.1.4. 滋賀県朽木方言

(20) a. [ウ]チノ [ヨメノ [イモートア 「うちの嫁の妹は」 25_kutsuki p164

b. [ア]ケノヒニ 「翌日」 25_kutsuki p168

c. [ソ]チノ [オジ]ーモ 「お宅のおじいさんも」 25_kutsuki p184

(21) a. [ムコノ ドーチューース]ワラニー

「向こうの道中の途中に」 25_kutsuki p167

b. [フロノカゲンシテ 「ふろの加減を見て」 25_kutsuki p182

c. ([U]ウチノ [ジ]ーモ 「うちのじいさんも」 25_kutsuki p184

「ウチノ」は談話資料での頻出語であるが、両形が出ている。(20)bは複合語と見るべきか。副詞のノ付き形が低起有核型で出ている例が1例ある。

(22)]タイ[ガ]イノ モンワ 「たいていの人は」 25_kutsuki p155

次の例の音形は、低起無核型の実現としては異例に見えるが、イントネーションが関わるか。

(23) イ[マノー ヨメイリカ]テ 「今の嫁入りでも」 25_kutsuki p163

3.1.5. 京都市方言

高起次末核型のノ付き形の例が見当たらない。次の例は、中井(2002: 111)に次末核型が分布するとしているので、「昇核現象」によって語頭核型に移行した3音節語であるとみられるが、無核化が起きていない。

(24) [ム]カイノ[ウ]チー 「向かいの家へ」 26_kyoto p257

低起無核の]イマノ/]イマワ 「今の/は」の実現形に変わったピッチの例がある。同じ話者である。

(25) a. [イ]マノ[ジ]ダ]イニワ 「今の時代には」 26_kyoto p235

b. [イ]マ]ワ 「今は」 26_kyoto p237

(26) a. [セツ]カク 「せっかく (お越しいただいたのに)」 26_kyoto p247

b. [セツカクノコッ]デ 「せっかくのことで」 26_kyoto p266

(25)aは、低起無核と高起無核の2文節の連続であり、文節間上昇を伴う平進調が期待されるが、いずれも緩やかな下降調となっている。(25)bも同じイントネーション形と見ることができのかもしれない。(26)aの高起無核副詞の下降調の発話も同じ話者である。

東京方言では有核形となる助詞の連続に対して、次の例では無核形が現れている。2音節助詞がアクセントの自立性を保っている例か。

(27) [ムカシカラノ 「昔からの」 26_kyoto p253

3.1.6. 大阪市方言

中井(2002: 546-7)参照。次末核型では有核が4語5例、無核が3語5例で、「イエ 家」は両方にカウントする。ほかに、継承形ではない無核ノ付き形が「タマゴノ」と「オーツモゴリノ」の2語出現する。中井(2002)によればいずれも周辺部に次末核型が残存する語である。なお、有核にカウントした出現例は、核による下降が小さく、無核型にも聞こえる。

(28) [イエ(I)ノ[ゲンガエ]ート 「家の縁起がいいと」 27_osaka p297

3.1.7. 兵庫県神崎方言

有核と無核が2例ずつ出ている。

(29) a. [デ]ンキン[ナツ]タ[ト]キノ 「電気になった時の」 28_kanzaki p277

b. [ムカ]シノコト[ユ]ータラ 「昔のことをいうと」 28_kanzaki p289

(30) a. [ニモンノマ]ンジューチュータ]ラ 「二文の饅頭といえば」 28_kanzaki p262

b. [オトコノ]ガ 「男のが」 28_kanzaki p303

(29)aは、3文節の語頭がいずれも高く、何らかのプロミネンスが加わっているとみられる。(30)bは、準体言用法のノが高接してノに核が生じているとみられる音形である。

3.1.8. 奈良県都祁方言

有核の出現例のみ3例出ている。

(31) a. [ウ]チノ[ヨメニ ナ 「うちの嫁にね」 29_tsuge p342

b. [ヨ]ソノ[センタグ]モン 「よその洗濯物」 29_tsuge p346

c. [バ]スノ [ツゴ]ー]モ 「バスの都合も」 29_tsuge p361

(31)は準対言用法とみられるが、低起で有核と無核の両形が出ている。話者が異なる。

(32) a. ウツクシノ [ナ]ー 「きれいなのをねえ」 29_tsuge p347

b. ウツ[ク]シノ [ツ]エト 「きれいなのをずらり」 29_tsuge p347

3.1.9. 和歌山県龍神方言

(33) a. [コノ[ウ]エノミチワ 「この上の道を(あっちから)」 30_ryujin p376

b. [コノ[シ]モノ[ヤ]マイムイテ 「この下の山へ出向いて」 30_ryujin p386

有核の出現例のみである。このほかに、高起無核の語のノ付き形に語末核が生じているように見える例がある。

(34) [ワシラーノ[コドモ]ノ [ジブ]ンニ 「私たちが子供だった頃に」 30_ryujin p370

有核で出ている「ジブン 時分」も、中井(2002: 98)では無核型と記録されている。この

談話資料では、頻出するアノヒト「あの人」が語頭核形で一貫するのをはじめ、アノも、フィラー的な用例を除けば語頭核的な音形で出ている。(33)aの「ウエ 上」も中井(2002: 66)では無核か語末核で、周辺部を含め語頭核型の記載はない。従って、高起無核型に語頭隆起がしばしば起きている疑いがある。この場合、(33)aも無核ノ付き形と見ることになるろう。

一方、副詞用法をもつ数量詞のノ付き形の無核の実現形もある。

(35) a. [オーゼノヒト]ジャッタワイ [ノ 「大勢の人でしたよ」 30_ryujin p377

b. [オーゼ]ヤッタ 「大勢だった」 30_ryujin p377

中井(2002: 117)では「オーゼイ 大勢」は語頭核で、周辺部に語中核2形と無核(少ないの符号付き)が記録されている。(30)と似た低起形容詞のノ付き形で、同様に二人の話者で有核と無核が揺れている例があるが、こちらは形容詞の名詞化用法である。

(36) a. ア[タ]ラシーノ 「新家の」 30_ryujin p375

b. アタラシ[ノ [カ]ドエ 「新家の角へ」 30_ryujin p378

3.1.10 和歌山県古座方言

紀伊半島南端の、中央式方言分布地域の外周部に位置し、高起式と核の実現のピッチ形が他の方言とやや異なる。高起式の冒頭音節は、音節内の上昇が聞き取れる場合が多い。有声長音節(例: オーナイ「大納屋」)の場合は、下降調ではなく上昇調に聞こえる。下げ核の実現は下降開始がやや遅く、また、次音節以降まで継続している発話も多い。核の次音節で下降が開始するタイプであるとみられる。金田一(2005a)に、三重・和歌山県境三重県側の阿和田(現御浜町)方言の記述があるが、これに近い体系であると思われる。

下降開始が遅く、核次音節が聴覚的には高く聞こえることもあるため、その場合は"]"による下降の表記は聴覚印象を優先し、核音節のカナ表記の後に"*"を付す。ノ付き形では次末核が実現しているとみえる語が2語3例ある。

(37) a. [オト*コ]ノ (I)ヒトデモ 「男の人でも」 30_koza p406

b. [[オト*コ]ノ[コ[ヤ]シ サ 「男の子だしね」 30_koza p423

c. [キ*]クマ [オ*]ヤノ [キ[ク*]ジュンガ
「菊馬の親の菊二というのが」 30_koza p399

(37)aの連文節構造では、第2文節の冒頭の高起の上昇がなく、先行ノまで続く下降のために非常に低く聞こえる。(37)bでは語頭の上昇は2音節にわたるが、低起型とは弁別可能である。

(38) [オート*]リ[ノ [タマゴ]サ 「軍鶏の卵を」 30_koza p415

(38)は次末核としたが、語頭核である可能性もじゅうぶんにある。トのピッチ形は平板

であるが、オーの上昇の末尾よりは低い。リで大きく下降した後、ノで持ち直し、タで僅かに上がる、という曲線である。「タマゴ 卵」は、高起無核型で出現している。

低起語ノ付き形での有核と無核の間の揺れが観察される例が、中井(2002: 65)が低起語末核とする「アワ 阿波」に対応する(37)である。3例とも同じ話者である。

- | | | | |
|---------|---------------|---------|--------------|
| (39) a. | ア[ー*]ノ トマ[リ]ー | 「阿波の泊に」 | 30_koza p401 |
| b. | アー[ノ] トマリ | 「阿波の泊」 | 30_koza p402 |
| c. | [アー*]ノ トマ[リ]ヤ | 「阿波の泊だ」 | 30_koza p402 |

3.1.11. 三重県浜島南張方言

金田一(2005a)のアクセント分布図では、浜島は鳥羽地区と同様の標準的な甲種方言と分類されているが、『全国方言資料』の談話音声資料のアクセントは、この分布図で「南勢式」、本文中で南度会方言として記述されているものと近いように思われるので、浜島南張方言としておく。

この体系でも、古座方言と同様に高起式と核の実現が他の方言と異なっている。句頭における高起式の語頭音節の上昇はほぼ一貫しており、また、古座方言と比べても低い位置からの上昇となるため、句頭の高起式の頭音節は、語頭核型の2音節語(HL)を除き、Lに聞こえる。たとえば二音節の高起無核語は聴覚的にはLHに聞かれる。しかし、同じくLHとなる低起無核語との弁別は、上昇開始が語頭音節語側かどうかで保たれているとみられる。3音節以上のアクセント単位での下降開始が遅れることは古座方言と似ているが、この体系でも単に核の音声的实现の特徴として説明できるか、あるいはたとえば、2音節語頭核語に助詞が接続した場合には核が後ろにずれるといった核自体の移動を伴うような形態音韻規則が必要となるかは、もっと詳細な検討が必要である。

一方、低起式の語末あるいは核音節までの上昇はその長さに応じて低平部が続きうる点で標準的な中央式と似ているが、上昇の開始は少し早いとみられる。たとえば、低起無核語が高起式の語の前に現れる場合でも、全体が低平となることはなく、語末音節には上昇が聞かれる。また、3音節目以降の核の前では、核の前音節に上昇が聞かれる。

例では、高起語の句頭音節の上昇を上昇調として"[↑]"で表記し、また、古座方言と同様に、核の移動はないものと見て核音節に"*"を付す。語末核型名詞のノ付き形の例が比較的多い資料である。

- | | | | |
|---------|-------------------|-----------|-----------------|
| (40) a. | [[ユ*キ]ノ]フル[ヒ*ー]]ニ | 「雪の降る日に」 | 24_hamajima p63 |
| b. | [[ウ*チ]ノ] [ヒトラ | 「うちの人たちが」 | 24_hamajima p76 |
| c. | [[ウ*チ]ノ] [タキリョーオ | 「うちの焚き料を」 | 24_hamajima p78 |

- d. [[オト*コ]]ノ[コーデ]ノ 「男の子でね」 24_hamajima p85
- (41) a. [[コアミノヒト*ラ]]ガ 「古網の人たちが」 24_hamajima p61
- b. [[オーアミノオナゴラ]ハシ[レー 「大網の女たち、走れ」 24_hamajima p63
- c. [[イキオイノエ*ライ]] [モ*]ナー]] 「威勢のよい者は」 24_hamajima p64
- d. [[クラノ [[ドーナ*]リニ 「倉の土塗りに」 24_hamajima p67
- e. [[ウエノ]ホー[エ 「上の方へ」 24_hamajima p68
- f. [[アシバノウエ*ー]] 「足場の上に」 24_hamajima p68
- g. ココ[[ノ [ウチノー [[イチノ シ*ン]]シエキワ
「このうちのいちばん縁の濃い親戚は」 24_hamajima p69
- h. ソコ[[ノ [ウチノー]オメデ[[タ]ジャデ
「そこのうちのおめでただから」 24_hamajima p73
- i. [[イエノ [モ*ン]]ラ]モ 「家の人たちも」 24_hamajima p74

(41)の「コアミ 古網 (地名)」「オーア*ミ 大網 (地名)」「イキオ*イ 勢い」「ク*ラ 倉」は談話資料中に有核の出現例がある。(41)gの「イチノ」は、漢数詞の「一」がノ付き形で無核化する例である。

3.1.12. 徳島県延野方言

ピッチ形はほぼ標準的であるが、(43)aでは、高起無核の第1文節が文節全体として上昇調になっているイントネーションを"["で示しており、古座方言・南張方言での高起式語頭Lとは異なる。

- (42) a. [オナ]ゴノ[コー]ラニワ 「女の子たちには」 36_nobuno p264
- b. [ヨソ]ノ ヒ[ト]ト 「よその人と」 36_nobuno p284
- c. [ウ]チノ[モ]ンカラ]モ 「うちの者からも」 36_nobuno p286
- (43) a. [[オナゴノ ガ]イナノワ 「女の子の悪いのは」 36_nobuno p264
- b. [バスン]ナカ[ナ]ラ 「バスの中なら」 36_nobuno p278

(43)bは、外来語が類推的に無核ノ付き形をとっている例である。

3.1.13. 愛媛県川内方言

徳島・高知の方言は、3音節次末核型名詞の「昇核現象」が起きていない形を保存するとされるが、この資料では、昇核現象のある語頭核型と次末核型で同じ話者で揺れがある例が観察される。

- (44) a. [ハ]ナシノ ナ[ニ]オ 「話のあれを」 38_kawauchi p329
- b. [スクモト オコメト]ノ 「もみがらとお米との」 38_kawauchi p328

- (45) a. [ツチノ デ]コオ 「土の人形を」 38_kawauchi p329
 b. [ヤマノ]ホーノ 「山の方の」 38_kawauchi p332

(44)a は、昇核現象により語頭核化した名詞の例である。また、(44)b では、助詞の連続の後でノが低接している例である。

- (46) [ツギ]ノ]フクロオ 「きれの袋を」 38_kawauchi p333

(46)は複数の問題がある発話である。まず、「ツギ きれ」は、「継ぎ」に由来するとすれば無核型になるはずであるが、ノが低接しているようにみえる。愛媛県東部にも分布する讃岐式や、本稿でも 1 地点談話資料の分析をした西部に無核型が下降式タイプになる体系が存在することを考慮すると、この発話も無核型の実現形と見られる可能性がある。ただし、談話資料中には(45)b のノがやや下降が早く感じられるほかは、下降式的な無核型は観察されなかった。また、「フクロ 袋」が無核型で出ているが、他の 2 名の話者は語頭核型と次末核型で揺れており、(44)の発話者自身も、3 回の出現例のうち最初の 1 回が高起語頭核型のピッチ形となっている。

低起無核型が語末核型のノ付き形で出る例が一つある。「ウス 臼」は、低起無核型の出現例が複数ある語である。

- (47) ウ[ス]ノク]チ 「うすの口」 38_kawauchi p324

ただし、この語は 4 人がかりの「もみすり」の作業の役割名として現れており、複合語とみなすべきかもしれない。

3.2. 熊野諸方言

以下の地点の談話資料データを含む。

- 24_miyama 三重県北牟婁郡海山町河内(現紀北町)
 29_shimokitayama 奈良県吉野郡下北山村上桑原
 29_totsukawa 奈良県吉野郡十津川村小原

中央式との違いは、これらの体系が式の区別をもたないことである。これを、本来中央式が持っていた式対立の喪失という改新と見るのが金田一(2005)で展開されている通説である。これに対して、拙論では、祖体系の持っていた語頭核(1-3 類、2-4/5 類、3-6/7 類)が降り核化に伴って式に変質し、中央式の式対立が発生した、と考える。熊野諸方言は、この改新が起きず、祖体系の語頭核を保持している体系だということになる。十津川の体系は、アクセント研究の初期から東京方言と同様の「乙種」として知られ、下げ核体系の内輪方言に分類される。下北山村方言は、服部四郎(1954 : 15-16)が弁別に関与しない初拍卓立があるが、音韻論的には東京方言と同じ 2 音節名詞のアクセント素であることを指摘

した点が知られる。海山町の談話音声資料は、降り核体系にとどまっているという分析も可能である。この分析は、金田一(2005a)で尾鷲方言の分析として「語頭の滝」を想定したのと同様、先行文節との文節連続でのピッチ形に着目したものである。海山方言と下北山方言との類似は、無核型のピッチ形にさまざまな変異形があることである。

3.2.1. 三重県海山河内方言

山口幸洋(2003)の南牟婁郡諸方言の報告には、興味深い記述がある。各地点の資料提供者のそれぞれについて、無核型と判断する 2-1 類と 2-4 類で、単独形と助詞接続形でどんな音形が出たかを一覧にしたものである。音形の分類は、「低平」「高平」「上昇」の3種が語単独で定義できる基本型に、文節形にのみ適用されうる「(低平) 高接」「(高平) 低接」の2種と、派生的な「下降」2種と、「重起伏」2種の9種を区別する。「下降」が派生形となっているのは、下北山村の「初拍卓立」を意識したものだと思われる。一覧では、地域により少し差があるものの、多くの話者がこれらの異なる音形で答えていることがわかる。

北牟婁郡海山町の談話音声資料でも、無核型にはさまざまな音形が現れる。頻出語彙の「ウシ 牛」の出現例を例示する。

- | | | |
|-----------------------|-------------|----------------|
| (48) a. [ウ]シ カエ]テナー]] | 「牛を交換してね」 | 38_miyama p97 |
| b. [コンドメ]ノ [ウシ]オ | 「この次の牛を」 | 38_miyama p97 |
| c. [ソ]ノ ウ[シー]ホレコン]デ | 「その牛に惚れ込んで」 | 38_miyama p97 |
| d. [ソ]ノ ウシト | 「その牛と」 | 38_miyama p98 |
| e. ウシ[ニヤー]] | 「牛には」 | 38_miyama p103 |

このようなさまざまな位置の「高」の中で、特に上昇幅が大きいものが次のように分布している。区別のために後続音節の上昇調を示す"["で表記する。

- | | | |
|---------------------------|--------------|----------------|
| (49) a. ウ[[シ] コート]ルト | 「牛を飼っていると」 | 38_miyama p103 |
| b. ウ[[シ]モ ナ[[ガ]ラク [コーテキ]テ | 「牛も長い間飼って来て」 | 38_miyama p103 |

(49)a のような語末の卓立した無核形は、短い第2類動詞の活用形、つまり、語頭核が期待される動詞の前に例が見つかる。

- | | | |
|--------------------|------------|----------------|
| (50) a. サ[[ケ]ノンデ | 「酒を飲んで」 | 38_miyama p88 |
| b. [イ]チニ[[チ]ツイ]トル | 「一日中ついている」 | 38_miyama p99 |
| c. ヨージ[[ノ]アル ヒトア]] | 「用事のある人が」 | 38_miyama p113 |

(49)b の例のように、モやデモは、無核型の語に接続する場合には直前の音節を上昇調で卓立させると考えられる例も多い。

- | | | |
|----------------|------|---------------|
| (51) a. ワ[[シ]モ | 「私も」 | 38_miyama p96 |
|----------------|------|---------------|

b. オヤジサ[[ン]モ	「おやじさんも」	38_miyama p96
c. オト[[コ]モ オナ[[ゴ]モ	「男も女も」	38_miyama p102
d. オ[[レ]モ ノー]]	「わたしもね」	38_miyama p118
e. オンタ[[デ]モ	「雄でも」	38_miyama p99

助詞モは、隣接する中央式諸方言で低接の、アクセント単位としての自立性をもつ助詞であり、拙論では本来有核であったと見る。このことは、1 アクセント単位（文節）の中にせいぜい1個だけ現れるこの上昇調卓立音節が、次音節の降り核によって（予期的に）実現している、と考えれば、説明しやすい。児玉(2018)で同様に降り核として分析した岩手県中野方言でも、語頭降り核に先行する位置での同様な予期的上昇を観察した。

拙論では、中央式で（祖体系で「低結式」だった）2-5 類の語末下降が下げ核となったのは、祖体系の語頭（降り）核が「式」に変化した結果であるとした。語頭の降り核が残っている体系では、語末下降は核に変化せず、消滅して 2-4/5 類の区別を失うと考える。金田一(2005a)の尾鷲式、山口(2005)の「ム x」式は共に、2-4/5 類が合流したと分析されている。海山方言の談話音声資料では、2-5 類の出現例は、次の「アメヤ 雨は」だけであるが、2-4 類の「イマワ 今は」と同じ、冒頭2音節で平進して文節末で下降するピッチ形となる。

(52) アメ]ヤ [[フ]ロガ 「雨が降ろうが」 38_miyama p104

ただし、この体系が降り核体系と認められるか、あるいは「平進式」のような式を認めるべきかは、この談話音声資料だけで結論は出せない。先行する文節があつて「語頭の滝」が出現できる環境は限られている。そうでない環境では、(52)の「アメ」の語頭のように、平進の音形となる。「語頭核」型が連続して、2 文節が平進となる例もある。この音形は、「降り核」では説明できず、「低」のレベルの実現や、山口(2005)が取っている「平進」といった、中央式の式対立の方向の解釈が必要になる。一方で、語頭核とみられる語の頭音節が長く、この音節自体が下降調となっており、核音節での下降という「降り核」らしい例も出る。談話音声資料のピッチ形には、長音節と短音節を区別すべきだと思わせる点があるが、語頭核の場合もその1例である、

(53) a. [カマナイ]カイ 「鎌はありませんか」 38_miyama p112

b. [カマアル]デ 「鎌はありますよ」 38_miyama p112

(54) a. ミナ[ヨー]]テ ナー]] 「みんな酔ってね」 38_miyama p90

b. [[ユ]ミ ヌー]]テ ナー]] 「弓を射てね」 38_miyama p90

以上、さらに分析が必要な点もあるが、語頭核の解釈は多音節語の語末核には影響せず、

語末核は次末音節の急な上昇に続く下降、これを欠く場合は無核として、この資料においても、語末核型の名詞のノ付き形の無核化を検証することができる。次のようなものをあげる。

- (55) a. ユミ]ノ [ケー]]コ 「弓の稽古」 38_miyama p91
 b. [メ]ンタベコノ [ホー]]ワ 「雌の子牛の方が」 38_miyama p102
 c. ウチ]ノ [[タ]メ[ニ]モ 「うちのためにも」 38_miyama p103

(55)b は、ノ付き形以外では1音節卓立のメンタ[[ベ]コで安定している。

- (56) [ヒ]ルノ]] [ホ]ンジェンニ ナル]ト 「昼の本膳になると」 38_miyama p89

(56)の例は、語頭卓立型の無核型と語末核型を語頭音節のピッチ形だけで判断することになる。この例では、途中で言葉を選んでいるため句末のノの下降が長い、最初の2音節のピッチ上昇・下降は小さく、無核型と判定する。

同じノ付き形で有核と無核の両形が出るのは次の例である。

- (57) a. コン[[ド]メ]ノ バクローサンワ 「この次のばくろうさんが」 38_miyama p97
 b. [コンドメ]ノ [ウシ]オ =(48)b

このほかに有核形と思われる形が出るのは、次の例である。いずれもノの直前に上昇がある。この点で、モに似ているが、この形が出る語は副詞用法をもつものが多い。

- (58) a. [[イ]チネンニ]イッペ[ン]ノ 「1年に1回の」 38_miyama p88
 b. アノジ[[ブン]ノ [トーヤ]ワ 「あの頃の禱屋は」 38_miyama p91
 c. イ[[マ]ノ コド[[モ]ラデモ 「今の子供らでも」 38_miyama p94

次の例は準体言用法であるが、2つの変異形の関係は不明である。

- (59) a. ヒヤクゴ[[ジュ]エン]]ノ 「150円の」 38_miyama p113
 b. ヒヤクゴジュー[[エン]ノ 「150円の」 38_miyama p113

3.2.2 奈良県下北山方言

無核型は低平で、語頭に卓立音節が現れることがある。この音節は、冒頭から高く、高平からの緩やかな下降の後、非下降となる。有核語は1音節が卓立する。下降は核の次音節まで続くが、その後は平進に戻るため、次音節で下降が完結するタイプの下げ核と分析する。核音節の前は平進であり、核音節では急な上昇から次音節に向けての急な下降に転じる。このピッチ形のために、語頭卓立音節や句末上昇と核の区別は、比較的容易である。"*"を付して区別する。ピッチ形自体は海山河内方言とも似ているが、卓立音節自体がアクセント核の位置であるという点が異なる。

以上に基づいて有核と無核に分析したノ付き形の例をあげる。

- (60) a. ヒ[ト*]ノ カネオ 「他人の金を」 29_shimokitayama p231
 b. ゲ[ロ*]ノ ホーイ 「わたしの家のほうに」 29_shimokitayama p242
 c. ハ[マ*]ノオバ[サン]] 「ハマおばさん」 29_shimokitayama p244
 d. オッ[ク*]ノ ジ*ーサンカ ノ]] 「奥のじいさんですか」 29_shimokitayama p245
- (61) a. コメノメ[シ*] ユータラ 「米の飯といえは」 29_shimokitayama p235
 b. [ショー]]ガツ[[ノ [[オ*ー]]ツゴモ]カ
 「正月の大晦日か」 29_shimokitayama p240
 c. [メ]シノ クワン ヒモ [ノー]] 「飯を食べない日もね」 29_shimokitayama p240
 d. [コ]メノ オカイ[ジャ] ナイン]ジャ
 「米のお粥じゃないんだ」 29_shimokitayama p241

(61)a は、語末音節が大きく上昇しており、核の実現形であるとみることができる。

(61)b では 2 文節の頭音節が共に長母音音節であるが、第 2 文節側の頭音節は冒頭に上昇がありピークから直ちに下降するという音形であることから、語頭核の実現形であるとみる。

副詞用法をもつ数量詞にノが低接する例が一例ある。この例でノの前の卓立音節は通常の核音節とは異なっており、ピークが音節末にある。

- (62) オーゼ[ー]ノ [カ*]ナイヤナヤカン 「大勢の家族などの」 29_shimokitayama p241

3.2.3 奈良県十津川方言

内輪式であることが古くから知られる方言であるが、この談話音声資料のピッチ形は東京方言とはかなり異なっている。無核・有核を問わず、句頭では中央式の高起の語形のように語頭音節の冒頭から高い文節がほとんどである。核は、次音節までで下げ止まるタイプの下げ核であるとみられるが、下降の開始は核音節から始まっている場合もあり、核音節が先行の高平部より低い印象を受ける発話も多い。無核型の文節は、付属語側に核がない限り高平を保つが、句末音節で下降がある。

奇妙なのは、ごく少数、中央式の低起式のように低く始まって上昇のある文節があることである。語として一貫してこのピッチ形となるのは「カシ 榎」で、カ[シ]モ、カ[シューー]]、カー[シ]ノといった語形で現れる。もう一つは単独例の「イマワ 今は」(p207)で、語頭核のイが下げ核として発現せず、ワで上昇する。「カシ 榎」は中井(2002: 68)では低起有核あるいは語頭核と記されており、他の 2-5 類名詞が一貫して他の語頭核名詞と異なる低起の語形をもつとすれば、拙論にとっても大きな課題となるが、残念ながら資料中には 2-5 類名詞の例がない。他に、語頭核型については句頭以外で下げ核が実現しないのではないかという印象もあるが、この点については今後の解明を待つ。

語末核型の名詞のノ付き形の例は少ない。

- (63) a. [ホネ*]ノ オレルンデ ノー]] 「骨が折れるんでね」 29_totsukawa p200
b. [イシ*]ノ ヨー]] 「石の上を」 29_totsukawa p207f
cf. [ウラノ]] [オバラ 「浦のおばさんなんか」 29_totsukawa p208
- (64) [オナゴノヒト]ラー 「女の人たちが」 29_totsukawa p213

(63)はいずれも核音節が語頭よりやや低く聞こえる例であり、無核型の句末下降とはピッチ形が異なる。

3.3. 垂井式とその周辺

以下の地点の談話資料データを含む。

- 21_kuze 岐阜県揖斐郡久瀬村西津汲(現揖斐川町)
16_nyuzen 富山県下新川郡入善町小摺戸
29_totsukawa 富山県東砺波郡平村上梨 (現南砺市)
17_shiramine 石川県石川郡白峰村白峰 (現白山市)
17_notojima 石川県鹿島郡能登島町向田 (現七尾市)
17_(wajima)-nafune 石川県輪島市名舟町
17_(wajima)-ama 石川県輪島市海士町

垂井式は服部四郎により 1930 年代に命名された体系であり、アクセント核の有無と位置については中央式とほぼ同じであるが、中央式のもつ式対立を欠く体系として、中央式周辺の多くの体系の類型として用いられている。拙論では、中央式から式対立を失う変化を経たと見るのではなく、上げ核の祖体系が降り核化し、祖体系の語頭核が核としての性質を失った際に、式対立を獲得しなかったという解釈をとる。

『全国方言資料』に収録されている垂井式体系の談話音声資料は、富山県の 3 地点のみである。富山の垂井式は、2-2/3 類に統合した類が、さらに語末母音の広狭に条件づけられた分裂という改新を経ていることがしられている。語末母音が狭い 2-2/3 類名詞は語末核型ではなくなっているのである。

富山県の垂井式は中央式地域に隣接する他の垂井式から孤立しているようにみえるが、間にある北陸・中部の諸方言の垂井式と共通の特徴は、祖体系で語頭上げ核だったものが、核体系から脱落する改変を経ていることだと見ることができる。この点で、中央式を含めて連続した改新が認められる。

岐阜県久瀬村は揖斐川の上流に位置し、垂井アクセント地域によって近畿の中央式地域から分断されている。服部(1931: 24)はこのアクセントを「純粹の『近畿アクセント』」で

興味深い」としている。談話音声資料でもこの体系が式対立を持っていることはうかがえるが、しかし、その実現の仕方は中央式とはかなり異なる。中央式の「低起」に対応する現象は確かに認められるが、「高起」の側に「低起ではない」という以上に積極的な性質が見いだされないのである。これは、本来の祖体系の語頭降り核の性質を受け継いだものが「低起式」である、という可能性を示唆する。中央式の式体系が核のみの体系からの改新によって生じうるといふ拙論の根拠となる方言である。

石川県の加賀地方には祖体系の無核型が有核型に変化した体系が分布するが、その前段階を示す体系として注目されるのが白峰方言である。無核型が「下降式」と呼ばれる独特の音形を取るが、降り核化を経た核体系からは区別されている段階である。語頭核型は無核型となるが平進を維持し、下降式無核との弁別を保ち、中央式とも似た式体系となっている。この下降式無核型と有核型が有核側に統合するのではなく、さらに2種類の下降タイプの式に再編されて、式のみをもつ体系に変化したのが福井県北部の語声調体系である。

能登半島のアクセント分布は複雑であるが、これは、ひとつには祖体系の語頭核が核としての性質をどの程度保持しえたかが関わっているように見える。『全国方言資料』の海士方言と能登島方言の談話資料のものは、祖体系の語頭核が核として出現しているように見える語例が多い。もう一つの変異要素は、祖体系の無核型に由来する型が下降のあるピッチ形をとるか平進的なピッチ形をとるかである。能登島方言と輪島名舟方言の無核型は一種の下降式無核とも解釈可能な音形となっている。

「無核化したノ付き形」を祖語からの継承と見る本稿では、特にこのような下降のある無核形と下げ核有核形のピッチ対立に着目する。

3.3.1. 岐阜県久瀬方言

この談話音声資料の体系は、中央式と同じく、語頭核が式に転化した結果、降り核の実現形が一つ前の音節の下げ核の実現形と再解釈された体系であると見る。中央式の高起式は、有核語あるいは低起無核語に後続するとき、文節間でピッチ上昇して、新たに「高」を設定するという性質をもつが、談話資料音声では有核語の後も下がったピッチのまま平進する。これに対して、低起式の語頭は先行無核語の後でピッチを下げて、つまり「語頭の滝」を実現して「低」に戻り、高起式のようにそのまま平進することはない、という違いがある。この点はこの談話資料音声も中央式と同じである。つまり、「語頭を『低』で開始し、核による下降または低起式の語が後続する場合にその直前までにHまで上昇し、そうでなければ語末まで低を維持する」という低起式の側の指定のみで説明できる式体系である。有核語に後続する場合は、高起・低起の弁別は失われる。

高起式と低起式のピッチ形も、共に核がない限り非下降という点以外ははっきりした弁別がなさそうである。高起有核でも、下げ核の直前が卓立し、それまでは平進というピッチ形が現れうる。このため、ノ付き形でも低起無核の場合と高起無核の場合ではっきりしたピッチ形の差がない。出現例は、高起無核のものはすべて無核ノ付き形である。

- (65) a. ウチノシ[タ]マデ 「うちの下まで」 21_kuze p286
 b. ウチ[ノ]ガ 「うちの人」 21_kuze p289
 c. トキノアイ[ダ]ニ 「『いつか』に」 21_kuze p293
 d. テン[キノ]エー[ト]キャ 「天気の良い時は」 21_kuze p298
 e. [ベントノ]マーシガ 「弁当の用意が」 21_kuze p307
 f. アンタノオッカ]サンモ 「あなたのお母さんも」 21_kuze p311
 g. オヤノワカ[レ]ワ 「親との別れは」 21_kuze p312
 h. [アント]カ 「あなたのところは」 21_kuze p313

(65)b は準体助詞ノ付き形であるが、助詞は統合して語末核語となっている。(65)c は注釈によれば「食事と食事の間」の意味とあるので、複合語とみるべきか。

有核となっているのは、低起由来の場合のみである。

- (66) a. ア[メ]ノ フル[ヒ]ワ 「雨の降る日は」 21_kuze p298
 b. ア[ソコ]ノ チャバタ]ン 「あそこの茶畑の」 21_kuze p297

(66)a は、2-5 類の低起語末核が保持されている例である。(66)b の「アソコ あそこ」は中井(2002: 68)では低起無核または次末核であり、この方言でも同じであるとすれば、ノ付き形で語末核が出ているということになる。

3.3.2. 富山県入善方言

核音節が文節内で卓立し、その前後は概ね平進する音形が多く聞かれ、次音節まで下降するタイプの下げ核であると考えられる。無核型は句内の後続文節に核(あるいは何らかの「高」がある場合には低平であるが、句全体として無核のときは句頭の上昇のあと平進する。

富山方言の場合、2-2/3 類の条件付き分裂の結果、これらの類の語末母音の広い語が 2-5 類に合流して語末核型になる、という変化が起きる。語末核型は、現代京都と同じ体系であるとすれば無核化ノ付き形がなく、一般助詞付き形と同じ規則的なアクセントとなる。このため、語末母音が広い場合に平準化が起きて無核ノ付き形が使われにくくなる、ということが予想される。実際、語末核型の名詞で無核ノ付き形の語例は一例もないが、この点は次末核型でも同じである。

- (67) a. シ[ト]ノ ア[ネ]マニ 「よその娘に」 16_nyuzen p63

b.	ア]シノ エ	「足の上に」	16_nyuzen p71
c.	タ]ビノ ホーエ	「旅の方へ」	16_nyuzen p77
d.	ゼン[シエ]ノ [ゴ]エン[ト	「前世の御縁と」	16_nyuzen p84
e.	オ[ヤ]ノ テマ[エ]デ	「親の立場では」	16_nyuzen p86
(68) a.	エ[マ]ノ コ[ト]モニ	「今の子供に」	16_nyuzen p71
b.	ソ[コ]ノ ウ[ツ]モ	「あなたの家も」	16_nyuzen p77
c.	コ[コ]ノ シ[ト]ツ	「ここの家の人たち」	16_nyuzen p79

(68)a-c は、中央式で低起無核名詞ノ付き形が次末核形で出る例に対応するが、談話音声資料では「エ[マ]ト 今と」も有核で出ている。副詞用法の数量詞のノ付き形は次の1例である。

(69)	タク[[サーン]ノ	「沢山の」	16_nyuzen p59
------	-----------	-------	---------------

3.3.3. 富山県平方言

句の音調は入善方言とかなり異なる。有核型では句頭の上昇の後、核音節まで高平を維持し、次音節から複数の音節にわたって下降する。次音節で下降が開始するタイプの下げ核であるとみられる。無核の句では高平調にならず、句末音節が卓立することも多い。

語末核型名詞のノ付き形は、有核と無核の両方が出る。(70)b はノが大きく下降しているので、下降開始の遅れた有核型と見る。

(70) a.	[ナ]ツノ ミチヨ]リ	「夏の道より」	16_taira p124
b.	ウ[チ]ノモン]ナ	「家の者は」	16_taira p146
(71)	コメ[ノ ハッ[ト]モ	「米の八斗も」	16_taira p125

「イマノ 今の」も無核形である。

(72)	イ[マノモン]カラ ミリャ	「今の者から見れば」	16_taira p127
------	---------------	------------	---------------

3.3.4. 石川県白峰方言⁴

白峰方言のアクセント型の分析とその音声的实现については、新田哲夫(1985)に詳細な記述があり、『全国方言資料』に収録の談話音声資料もほぼこれに基づいて分析することができる。この分析の(n)-k型が、拙論の祖体系の「無核型」が継承されたとみる下降式に対応するが、この型の語を含む文節が無核の句の最後の文節を構成する場合の特徴は、2 モーラ目の後の下降である。一方、核もまたピッチ下降を引き起こす下げ核であるが、下げ核による急な下降に対して、下降式のほうは、最終モーラまでの「緩い下降」に特徴があ

⁴ この談話資料については新田(2004)に改訂と詳しい解説がある。(73)a のカナ転写と訳はこれに従っている。

る。注意しなければならないのが、「緩い」のはあくまで最終モーラまでの傾斜であり、2モーラ目から3モーラ目への下降はかなり急なものでありうる、という点である。特に、3モーラ文節のように下降部が短い場合は、2モーラ目に下げ核がある場合との差は小さくなる。下げ核の場合は、核の後に2音節以上が続く場合も下降が継続し、「次音節で下降が開始するタイプ」の類型であると考えられる。下降開始に先立って核音節に上昇が聞こえる場合も多い。これに対して、下降式の下降は、「段差」に近い。

一方、語頭核型（高結）に由来する無核型は、2モーラ以上の句に共通してみられる句頭の上昇を除き、平進が特徴である。この語頭から非下降のピッチ形は、語頭降り核に由来するものと思われるが、語頭以外の核が次音節以降も継続する下降を引き起こすのは完全に異質なものになって分化している。

核の位置は、中央式と同様、降り核の再解釈により祖体系からひとつ前にずれている。無核化を起こす次末核型とみられる名詞のノ付き形の3つの出現例は、音形がかなり異なるが、いずれも下降式タイプの方の無核形と解釈できる音形で出ている。

(73) a. イ[エノイネ]ラワ 「私の家のかみさんなどは」 17_shiramine p136

b. ウ[チ]ノ コ[ヤ]ノ ウ[シ*]ロ]ニ 「うちの物置小屋の裏に」 17_shiramine p140

(73)a は、非句末の実現形である。(73)b の二つのノ付き形は、いずれも単独で句を構成しており、句末の下降式形が出ていると分析する。(73)b のノの下げ幅は大きい、「サバノ 鯖の(p148)」もほぼ同じピッチ形である。

3.3.5. 石川県能登島方言

この談話音声資料では、無核形は文節単独または句末文節で句末下降がある。下降開始の位置は白峰方言のように固定しているわけではない。文節末音節の下降調として実現する場合もある。ム[カ]シノ~ム[カシ]ノのような交替も観察される。句末以外では非下降である。核の下降も、白峰方言のような「下降開始」ではなく、下降が1音節で終わっているため、第2音節後の下降が核であるか無核形の下降であるか判然としない語もある。

核の位置は、白峰方言とは異なり、拙論祖体系の上げ核の位置の下げ核であるので、中央式・垂井式と比べて下降開始は1音節遅い。語頭核が句頭の「高」で出ることが多いので、内輪等、いわゆる東京式の印象を受ける。この「高」に続く2音節目からは平進である。ただし、句頭以外の位置では最初から平進となるので、この「高」はやはり他の「核」とは区別すべきであるかもしれない。

語末核型名詞のノ付き形と見られる例は、2例出ている。(74)は非句末形であり、無核化していると見て間違いはない。(75)は、「ゴ[ボン]ノ ?御坊の」の言い換えであるが、有核と

みるべきかどうかの判断は現段階ではできない。

(74) ヌ[キノフ]ル ナカニワ 「雪の降る中を」 17_notojima p177

(75) [マエ]ノ ゴ[ブ]ノ 「以前のお寺の」 17_notojima p185

次の例は、祖形の語頭核型のノ付き形であるが、二つの音形で出ている。いずれも無核とみる。

(76) a. イマノ[モン]ナ 「今の者は」 17_notojima p180

b. [イ]マノモン]ナ 「今の者は」 17_notojima p180

3.3.6. 石川県輪島名舟町方言

この談話音声資料でも無核文節の句末形（単独形を含む）として下降式のピッチ形が観察される。下降開始の位置は白峰方言と同じく2モーラ目である。下降の有無で交替のある語（「ソクサイ 息災」）もあるが、下降はほぼ一貫していると思われる。(77)はノ付き形で、有核を維持しているものと無核化しているものとのミニマルペアである。

(77) a. [[ハ*マ]]ノ[[ショー]コナンシ 「浜の証拠なんだ」 17_nafune p100

b. ハ[マ]ノ[[ショー]コナンジャウエーシ

「浜であった証拠なんですよ」 17_nafune p100

どちらも句頭の上昇があるが、有核の(77)aのほうが「ハマ」の上昇・下降が共に早い。(77)bは、「サケノ 酒の(p97)」「ハバノ 幅の(p100)」など、無核型と思われる語に一貫して出るピッチ形である。(77)aでは下げ核と見てハにアクセントとして"*"を付したが、降り核としてマに振る可能性もある。この談話音声資料の自由会話2は「浜がなくなった話」であり、「浜」は頻出語彙であるが、ハが高く聞こえる発話とマが高く聞こえる発話が同程度に出る。特に、助詞を伴わない単独形では一貫してハが高い。おそらく、核の弁別特徴は語末音節での下降開始である。無核型の下降式のほうは、白峰方言と同様に音節間のピッチ下げと分析できる。語末の下降開始は、語末母音が狭い場合「ワキ 脇(p104)」や「ナミ 波(p104)」に早いと見られ、これらの語は助詞が接続する場合でも頭高に聞こえる。

下降を起こす核を、降り核とみるか下げ核とみるかは、祖体系の語頭核を核として残しているかどうかに関わる問題である。祖体系の語頭核型の特徴を核と認めれば、(77)のような語の核は次音節とみなしなければならないので、降り核となる。

祖体系の語頭核型は、句頭の上昇を伴わずに低い平進で出る例が多いが、語頭1音節が高い発話もある。この必ずしも実現しない「高」を降り核の実現とみるとしても、下降開始型の他の位置の核とは違うものになっていると考えなければならない。祖体系の語頭核型でこの上昇がない場合に、同じ型が後続するときに語末音節が上昇している例もあるが、

この条件についてはより詳しく分析する必要がある。

ほかに語末に核の下降をもつ名詞のノ付き形が核を保つ例と無核化する例をあげる。

- (78) a. シ[ト*]ノ]コー 「他人の子を」 17_nafune p90
b. [[ハ*マ]]ノ[[ナイガン]ナッタ]ガニ 「浜がなくなったのには」 17_nafune p104
- (79) a. ヒ[トンナ]カニ 「人の中では」 17_nafune p92
b. ヒ[ト]ノ[[ゲス]クジルモ]ンノ 「人のおしりをつねる者や」 17_nafune p92
c. ウ[チ]ノイシ[バ*]ヤサ]キヤー 「家の土台だから」 17_nafune p121

(78)a と(78)b は第 1 音節が無声化しており上昇開始の判断ができないが、(78)a でコまで続く急な下降で有核と判断した。(79)a の「ナカ 中」は、句頭以外の位置で祖体系の語頭核型に語頭の H が現れている例である。句末のニの下降はほとんど聞き取れないのでこの「高」は他の位置の核と異なり下降の後平進が続くタイプである。

3.3.7. 石川県輪島海士町方言

この談話音声資料では、祖形の無核語に対応すると見られる無核型は、東京方言にも似た句頭の上昇の後、平進する音形となる。一方の、祖形の語頭核語に対応すると見られる無核型は、句頭では、ナニなど疑問語の一部を除き、語頭が上昇する。核による下降はその音節だけで終わり、後は平進となるので、音形の点では語頭の上昇も核に似ていて、共に次音節までで下降を終えるタイプの下げ核とも分析できる。下降の位置は祖体系の上げ核の位置の下げ核であるので、降り核化後、語頭核も含めて核による下降のタイミングが遅くなった結果、下げ核になった、という解釈も、句頭の音形については可能なように思われる。ただし、句頭以外の文節では低平であるので、降り核の段階にとどまったと考えなければならない。

語末核型名詞のノ付き形は、有核と無核が各 1 例出ている。

- (80) ウ[チ]ノ [モン]モ 「家の者も」 17_ama p165
(81) ヘ[ルノ]シゴトワ 「昼の仕事は」 17_ama p154f

3.4. 佐渡の諸方言

『全国方言資料』には、佐渡の以下の 3 地点の談話資料データが収録されている。

- 15_aikawa 新潟県佐渡郡相川町大倉（現佐渡市）
15_hatano 新潟県佐渡郡畑野村後山（現佐渡市）
15_hamochi 新潟県佐渡郡羽茂村大崎（現佐渡市）

金田一(2005b)では、それぞれ「外海府式」「両津（佐渡主流）式」「小木式」に分類されている地点である。佐渡島の北端部、中央平野部南部、南端部に位置する。

これらの方言はすべて、「下げ核体系」と解釈した場合の（祖体系から継承した）有核形の核の位置が中央式と同じく一つ前になる。また、祖体系の語頭核が下げ核としては現れない、という点で、垂井式や中央式と共通の特徴を持っている。垂井式と分類されないのは、地点による差はあるものの、祖体系の無核型が語末核型になり助詞が低接すると報告されるものが多いからである。ただし、この下降が出る相川町大倉と羽茂村の資料を聞く限り、句末下降が観察され、無核型はこの下降のない音形との交替がある。相川町大倉では、語頭核型の語でも同様の句末下降が観察される。上野(2006: 18)では、相川方言の無核動詞の終止形と連体形の型の分化を、「言い切り」と「接続」の違いに結び付け、下降式の下降幅が「言い切り」形で大きくなるのがこの型の次末核を生んだとする再建を行っている。談話音声資料で観察されるのは、まだこの下降が型の分化を生じていない段階であるように思われる。

3.4.1. 新潟県相川大倉方言

句頭の上昇のパターンの違いが重要である。高平に近い1音節の上昇は、祖体系の無核型に対応する型に任意に起きる語頭の卓立である。この卓立の後の段差的な下降の後は、平進が続く。卓立がない場合に観察される句末の下降も、ほとんど起きていないとみられる。卓立がない場合の祖体系無核型と有核型では、語頭音節が上昇調で、次音節までの上昇となる。語頭音節に核がある場合には、上昇調が聞き取りやすく、長めに発音されている発話もある。核は、祖体系より1つ前の下げ核として分析すると、次音節で下降が開始する下げ核とみられ、下降は複数の音節にわたる。従って、語頭卓立のある無核型と語頭核型の聞きわけは可能である。語頭音節が低平であり、次音節で上昇して平進が続くのが、祖体系の語頭核型に対応する型であるとみられる。この型は、句頭以外では平進となるが、この型でもやはり、句末の下降が出る。つまり、句末下降の出る2形は無核型で、語頭で上昇する非低起と、低平の低起の2式がある、というような分析ができる。1音節語では有核がなく2式の対立で、たとえば、低起式1音節の「テ手(p39)」の助詞接続形は、上昇と下降の両方で出ているが、非句末では非下降、句末では下降も可、というように分析できそうである。

大倉は羽茂に近い小木と並んで金田一(2005b)で一般助詞付き形で2-4/5類の弁別を保つとされる方言であるが、談話音声資料中に出る2-5類名詞は「コエ声(p35,p36)」が句末形の下降のある形、「アメ雨(p53)」が非句末ノ付き形で下降のない形が出る。積極的に弁別の存在を支持するデータはない。また、中央式で有核となっている「ヒトツ一つ」もすべての出現例で無核「ヒト[ツ(p36,p37)]」で出ている。

次末核型名詞のノ付き形は、有核・無核の両形が観察されるが、無核形は非句末形の例のみである。非低起式無核の語頭卓立や無核型の句末下降と区別するために、下げ核の位置に”*”を付す。

- | | | | |
|---------|----------------------|------------|---------------|
| (82) a. | ジューシ[[チ*ン]チノ[[バン]ニヤ | 「十七日の晩には」 | 15_aikawa p32 |
| | b. [[タ*]ショノモノンガ | 「よその者が」 | 15_aikawa p34 |
| | c. [[ユ*]キンナカニ | 「雪の中で」 | 15_aikawa p38 |
| | d. [[ソノト*]キノ | 「その時の」 | 15_aikawa p40 |
| (83) a. | オ*[ナシトシノモ*]ン]バツ[ケ]ー | 「同じ年の者ばかり」 | 15_aikawa p34 |
| | b. [[ムラノモ*]ン | 「村の者」 | 15_aikawa p42 |
| | c.]ア[メノタ]メ | 「雨のため」 | 15_aikawa p53 |

3.4.2. 新潟県畑野後山方言

本来の無核型と、語頭核型に由来する無核型の弁別がなくなっているのではないかと考えられる体系である。句頭の上昇は、語頭音節に核がある場合にこの音節が上昇調になることを除けば、無核型も有核型も、ほぼ、1拍目が低で2拍めで上昇する音形となっている。句末形では句末拍が下降し、非句末形では平進する。核の前もほぼ平進であるが、降り核に先立つ音節の上昇が大きいことが多い。核の下降は1音節で止まり、続く部分がある場合はほぼ平進に聞こえる。

「ムカ]シワ~ムカシャー 昔は」のような交替が観察されるが、ほかに語頭卓立の疑われる例はないので、型の揺れであると判断する。

次末核型名詞のノ付き形は、有核の2例である。

- | | | | |
|---------|---------------------|----------|---------------|
| (84) a. | [[コ*]メン [ナカニ | 「米の中に」 | 15_hatano p69 |
| | b. [[ト*]シン [[ヨ*ッ]タラ | 「年を取ったら」 | 15_hatano p76 |

3.4.3. 新潟県羽茂方言

この音声談話資料では、本来の無核型と、語頭核型に由来する無核型の弁別は保たれている。句頭の特徴は、相川大倉方言と似ており、句頭から平進する低起式と、句頭の上昇のある非低起式が区別され、非低起式の語頭音節に核がある場合は句頭音節が上昇調、そうでなければ2拍めからの「高」となるが、この上昇は有核型では核音節まで抑えられて核音節での上昇となる発話もある。また、高平調の語頭卓立は、1音節とは限らず、有核型でも観察され、重起伏的な発話が聞かれる。祖体系の語頭核型に由来する低起式無核型は、句末形でも句末下降が出ない可能性がある。句末下降が出ているかと疑われる例がないわけではないが、語頭卓立のない場合の非低起式無核型と比べると、その頻度はずっと

低い。

有核型の核は、次音節で下降が止まるタイプであり、語頭卓立無核型との弁別は、主に核音節の上昇調をはじめ、上昇の有無の弁別であるとみられる。有核型でも句末側は平進に近い発話が多いが、句末下降は目立たない。

中央式の低起有核型に対応する 3-7 類の語は、「ヒトツ 一つ」と「タマゴ 卵」は、共に有核（「ヒト]ツ* p103」「タ]マ*ゴ p107」）で出ている。2-4/5 類の例は見当たらない。

語末核型のノ付き形は、有核の例が 2 例ある。

(85) a. マ[ツバヤ*]シノ トウクニ 「松林のところに」 15_hamochi p94

b. [[ア*]シノ イテヤ*ー][モ*]ンバーツ[[カ*]リ
「足の痛いものばかり」 15_hamochi p96

単独例であるが、低起無核型名詞のノ付き形が次末核型で出ている例がある。中央式で見られる低起無核語の有核ノ付き形との関連は不明である。

(86) a. [イ*]マノ モ*]ナー 「今の者は」 15_hamochi p101

cf. イマノヨ*ー]]デ 「今のようでは」 15_hamochi p97

3.5. 四国・山陽西側の諸方言

以下の地点の談話資料データを含む。

- 39_birafu 高知県香美郡美良布町（現香美市）
- 39_otsuki 高知県幡多郡大月町竜ヶ迫
- 39_ogata 高知県幡多郡大方町（現黒潮町）
- 38_tsushima 愛媛県北宇和郡津島町
- 35_tsuno 山口県都濃郡都濃町（旧須金村）（現周南市）
- 35_shuho 山口県美禰郡秋芳町別府江原（現美祢市）
- 34_minochi 広島県佐伯郡水内村（現広島市）
- 34_shobara 広島県庄原市山内町（旧山内西村）

高知のアクセント体系は、中央式の低起無核型が語頭音節のみが「低」となる、『補忘記』に記述された室町時代京都と同じ体系であり、1910 年代のポリワーノフの現地調査以来、その保守的な性格が注目されてきた。つまり、中央式の式体系の成立段階を示す体系であるとも見ることができる。高起無核型と低起無核型の弁別は、もっぱら語頭音節に拠っており、この二つ無核型に接続する「高起」型は、いずれも平進接続となり、積極的な「高起」性がない。談話音声資料でも、有核語の核の下降した語末に「高起」型が「低起」型と同様、平進に接続する音形も多く聞かれる。この点で、3.3.1.の久瀬方言に似ている。た

だし、高知の場合、低起型が拙論で語頭上げ核とする語頭核の次を上げる性質を継承しているため、上げ核が降り核化した後も語頭核としての性質を多く維持しえたものと思われる。このため、四国地方南部ではこの「中央式」に、語頭核を核として保持した中輪式、「京阪式」に対するいわゆる「東京式」の体系が隣接しているのだと考える。

この四国西南部の中輪式体系の談話音声資料は、有核語で核の一拍卓立が特徴的である。核が語末側にあれば長い低平部が続くことになるが、この場合によく見られる現象として、句頭で語頭拍卓立が生じているのが大方方言である。この卓立は、有核型・無核型に共通する。一方、津島方言では、無核型に下降式的な1~2拍の上昇が観察される。この句頭の特徴を除けば無核側は低平である。有核型の核は一拍卓立ではなく、下降がなくなった昇り核的にも聞こえる音形が特徴的である。

中国地方側の中輪式方言は、特に西部で低平な無核型と、有核型の核の一拍卓立が目立つ体系が多い。必須なのは核の後の下降であるので、東京方言と同様の下げ核体系であると見ることができるが、同じ東京式でもピッチ形はかなり異なっている。拙論では、核の位置が共通であるのは共通改新ではなく祖体系から継承した特徴であるので、系統を考える場合には異なる変化を想定しなければならない。

3.5.1. 高知県美良布方言

この談話音声資料では、核音節に先行する部分が語頭からの平進となる高起式と、句頭で語頭拍が低い低起式の式対立がある。無核語に接続するとき低起式の語頭拍が下降し次拍以降も平進するので、降り拍的な解釈も可能であるが、核は「次音節で下降が開始するタイプ」であり下降が2音節以上続くため、句内で有核語に続く位置での高起・低起の対立は高起側の任意の上昇によるようで、降り核の実現は確認できない。低起高結と低結の違いが無核・有核の対立となっている点も合わせ、式対立体系とする分析を覆すことはできない。

中央式と同様に、降り核が1つ前の音節の下げ核と再解釈されたと考えるので、無核ノ付き形を持つのは高起次末核型である。有核・無核のノ付き形の出現例をあげる。

- (87) a.]ヒ[ト]リヤ [フター]リノ [シゴトヂャー
「ひとりやふたりの仕事では」 39_birafu p383
- b. [モトヤ]マノ ホーエ 「本山のほうへ」 39_birafu p386
- c. [ムコ]ーノ [カ]ーエ 「向こうの川へ」 39_birafu p388
- d. [ク]ワノ ナカオ 「桑の中を」 39_birafu p392
- (88) a. [オトコノ]ヤ[スデン]トリト 「男の低賃金労働者と」 39_birafu p381

b. [ウデノ]タツ[モ]ンニヤ 「腕の立つ者には」 39_birafu p382

低起無核型「イマ 今」の有核ノ付き形も現れる。

3.5.2. 高知県大月方言

この談話音声資料では、句頭の上昇で有核型と無核型が区別される。句内に核がない場合には、語頭音節の上昇の後で平進する。句末下降が聞かれる場合もある。句内に核があると、語頭から核の前音節まで低平調が続き、核音節で上昇して次音節が下降する。この下降は次音節で終わる。拙論では降り核体系から核の下降開始の実現が遅れる変化を経たものであり、核の位置は東京方言など「中輪式」と共通である。

語末核型のノ付き形には、有核のものと無核のものがあると見られる。

(89) a. ヤ[マ]ノ [カ]ミサマノオドリデ 「山の神様の踊りで」 39_otsuki p323

b. ヒロ[ミ]ノホー]カラ 「弘見（地名）の踊りで」 39_otsuki p323

c. クド[キ]ノ [[クドキハジメワ 「口説節の口説き初めは」 39_otsuki p324

d. コ[ガ]ノイエニ 「桶の上に」 39_otsuki p324

(90)の無核型のノ付き形を作る名詞は、いずれも語末核型であるかどうかの確認が取れていないが、東京方言からの類推では有核ではないかと疑われるものである。

(90) a. [[シンモジャノ オドリ]デ 「新亡者の踊りで」 39_otsuki p322

b. [[センシシャノ オドリ]デ 「戦死者の踊りで」 39_otsuki p322

c. ジューロクノト[シ]ニ 「16の年に」 39_otsuki p324

3.5.3. 高知県大方方言

この談話音声資料も中輪式とみられる体系である。句内に核がなければ平進で、核がある場合はこの音節の直前までが平進、核音節で急に上昇して、次音節から下降を開始する。この下降は次音節以降も続く。2音節以上にわたる下降が続く場合、下降を開始した核次音節内での下降が小さく、上昇から2音節が高く聞こえる発話もある。もう一つの特徴は、有核・無核の句を問わず、語頭から2音節以上の核による上昇のない部分がある場合に、語頭音節の卓立がしばしば聞かれることである。この「高」は、語頭核とは異なり、次音節以降のピッチに影響を及ぼさない。下降の後で平進に戻る。

語末核型のノ付き形には、有核のものと無核のものがある。語頭卓立との区別のために、核音節の後ろに"*"を付す。

(91) a. ア[[シ*]ノ]サキカラ アタ[[マ*]ノ]サキマ]デ

「足の先から頭の先まで」 39_ogata p411

b. [オ]マエ[[ク*]ノ] ヨメサン 「あなたの家の嫁さんは」 39_ogata p413

c. ワシ[[ク*]ノ] ヨ]メワ	「私の家の嫁は」	39_ogata p413
d. ヒ[ト*]ノクカラ	「人の家から」	39_ogata p414
e. ウ[チ*]ノ ゴ]テゴテワ	「家のごたごたは」	39_ogata p415
f. トッシヨ[リ*]ノ ヒトラガ	「年寄りの人たちが」	39_ogata p417
g. オラ[ク*]ノ] ヨメワ	「うちの嫁は」	39_ogata p417
h. ヒガ[シ*]ノ ホ*ー]エ	「東の方へ」	39_ogata p424
i. ナカム[ラ*]ノ オイ[セ*]サン	「中村のお伊勢さん」	39_ogata p426

(92) a. ナカムラノ]オイセ[サ*]ンデーテ

	「中村のお伊勢さんだと言って」	39_ogata p410
b. [アタマノテンギー	「頭のいただきに」	39_ogata p412
c. [イ]チノテ ヨエ	「一の手ですよ」	39_ogata p416
d. ムギンナカイ [イコー]ト	「麦(畑)の中に行こうと」	39_ogata p420

(92)c と(92)d は、ノ付き形で現れた名詞がこの方言で語末核型であるかどうかの確認が取れていない語である。

3.5.3. 愛媛県津島方言

この談話音声資料では、大方方言と同様に、句頭に語頭隆起があるが、大方方言では「ムカシノ 昔の」のように限られた例でしか観察されない語頭 2 拍の卓立が、さまざまな語について観察される。このため、「ウシノ 牛の」のような語が、3.3.4.の石川県白峰方言のような「下降式」方言と同様、助詞の低接のように聞こえる発話が目立つ。しかし、この方言では、核の実現形が特徴あるピッチ形で現れるため、「[ウシ]ノ(p349)」と語末核型名詞の助詞接続型の弁別は容易である。語中核では核音節の前は低平であり、核音節で上昇を開始し、次音節で下降を開始するが、このタイミングはかなり遅く、実際の下降はその次の音節で大きい。このため、(93)b では助詞は非下降のようにも聞こえる。語頭卓立との区別のために、核音節の後ろに"*"を付す。

(93) a. イ[[シ*]ガヨ]ル	「石が集まる」	38_tsushima p357
b. イ[[シ*ガ]ヨル[ケ*]ンダ	「石が集まるけれど」	38_tsushima p357

上昇開始音節は位置が固定しているので、昇り核体系のようにも見えるが、下降のほうも必須であり、上昇は下降に付随する現象と見て、「次音節で下降を開始する下げ核」と解釈するのが妥当だろうと思われる。

語末核型のノ付き形には、有核のものと無核のものがある。

(94) ウ[チ*ノホ*ー]エ	「うちの方へ」	38_tsushima p367
-----------------	---------	------------------

- (95) a. [ヤマノヨー]ニ 「山のよう」 38_tsushima p359
 b. ウチノ[[ジ*ー]サン]]ガ 「うちのおじいさんが」 38_tsushima p369

(94)は下降を欠くが、(95)b との比較で有核と見た。

3.5.3. 山口県都濃方言

句頭の上昇の後、核音節まで平進するタイプの音形をもつ談話音声資料である。核の実現は、核の次音節で下降が終わるタイプの下げ核であると見られる。特徴的なのは、核音節が後続の母音と融合して長音節化すると、核が1拍前にずれてこの音節が低平調となることである。「ワ]カー 若い(p210)」「カ]ミヨー 紙を(p203)」など。

語末核型のノ付き形は無核化した2例。

- (96) a. カ[ミノ ナ[リ]キン 「紙の成金」 35_tsuno p203
 b. ア[タマノ タカ]イ 「気位の高い」 35_tsuno p211

3.5.4. 山口県秋芳方言

無核型は緩やかな上昇調。大きな上昇がどこに来るかは変異があるが、語頭音節は必ず低いようである。有核型の句の核音節の前の上昇もこれに準じ、核音節でさらに上がってから下降する発話が多いが、形態素境界で上昇して高平部が続く例も見られる。核は下げ核で、語頭核は下げ幅が大きく次音節で下降が止まるが、語中核の場合は下降開始が遅く、次音節での下降幅は小さい。

語末核型のノ付き形には、有核のものと無核のものがある。

- (97) a. ジューガ[ツ]ノ 「十月の」 35_shuho p238
 b. サ[カ]ノ オバサン]カ 「坂(屋号)のおばさんか」 35_shuho p248

- (98) a. ジューガツ[ノ] オマツリ[ノ] マタ [ヤ]ドガ
 「十月のお祭りのまた当番が」 35_shuho p239

- b. ハタ[ケノ クサト[リ]デ アリマ]ス]デ
 「畑の草取りですよ」 35_shuho p249

- c. ヒ([ル]ノオカズニ[[コー]ョ]ケ ヨ
 「昼のおかずに買っておけよ」 35_shuho p253

3.5.5. 広島県水内方言

この談話音声資料では、無核型の語は低平であることが多いが、無核文節に後続する文節が必ずしも平進せず、ピッチが上がった段差で継続する発話がしばしば聞かれる。このような段差は、無核語内部に現れることもある。核音節は1音節卓立することが多い。核は、語頭核・語中核ともに、急な下降の後平進に戻る、「次音節で下降が止まるタイプ」の

下げ核である。

語末核型のノ付き形には、有核のものと無核のものがある。

- (99) a. オト[コ]ノ コドモヤ [ナ]ンカー 「男の子供やなんか」 34_minochi p165
 b. ミョージン[サン]ノ エ]ンヤエ 「明神さんの縁側に」 34_minochi p165
 c. アシ[コ]ン アノ ヒ[ノ]キガ 「あそこのあの檜が」 34_minochi p167
 d. ユノヤ[マ]ノ [サンガイ[チューモ[ナ]ー
 「湯の山の3階(家)というものは」 34_minochi p171
 e. オー[トー]ノ ハチ[ダ]エサンモ
 「大藤の八左衛門さんも」 34_minochi p175
 f. シ[モ]ノ ナンノ オバ[サン]ヨ 「下のなにのおばさん」 34_minochi p176
 g. キン[ジョ]ノ シ]ガ 「近所の人たちが」 34_minochi p176
- (100) a. コッ[チノ [ガワニ [ア]ルンジャ]ガ
 「こっちの側にあるんだが」 34_minochi p166
 b. ミョージンサンノ ホ]ーニ 「明神さんの方に」 34_minochi p166
 c. イ[エノ [ソコ[ー ヌケタ]ンジャ]ケン
 「家の底が抜けたんだから」 34_minochi p177

(100c)の無核部分の連続した上昇は、イントネーションが関与しているとみられるが、(100)aは特に expressive な表現ではない。

3.5.5. 広島県庄原方言

無核の句が低平、有核句内の（最初の）核は卓立するのが安定した基本の音形の談話音声資料である。核は次音節で下降が止まるタイプの下げ核であるとみられる。卓立する核音節が長音節の場合も、音節内部での下降が聞き取りにくい上昇型の音調となる。上昇を欠き卓立のない非句頭の文節の長音節核では下降が聞き取れる。

語末核型のノ付き形には、有核のもの例だけである。

- (101) a. キョ[ネン]ノ オドリ]ニヤ 「去年の踊りには」 34_shobara p138
 b. オト[コ]ノ ヒ[ト]ガ [ヨッ]タリニ
 「男の人が4人に」 34_shobara p139
 c. [イ]マカラ サ[キー]ノ モノ]ワ 「これから先の者は」 34_shobara p143
 d. ヤマモ[ト]ノ オバ]ーサンジャ [ノ 「山本のおばあさんですね」 34_shobara p152
 e. エーカ[ゲン]ノ モ]ンガ 「適当なものが」 34_shobara p155
 f. マ[ゴ]ノ カン[タ]ンフクオ 「孫の簡単服を」 34_shobara p157

準体言ノが有核で出現している用例も1例ある。

(102) コドモ[ノー]モ ヒ[ト]ツ 「子供のも一つ」 34_shobara p155

3.6. 九州の外輪式諸方言

次の地点の談話音声資料を分析する。

40_iwaya 福岡県築上郡岩屋村鳥井畑（現豊前市）

44_nishishonai 大分県大分郡西庄内村（現由布市）

44_ueno 大分県南海部郡上野村（現佐伯市）

豊前式とも呼ばれる九州の位置アクセント体系である。型の統合の面では2-1/2類、3-1/2類が合流する「外輪式」のタイプに分類される。東北の外輪式と同様、祖形の語頭核型でも2-4/5類、3-6/7類が合流している。拙論では、この合流が完了した後で降り核化の変化が（アクセント境界を越えて）及び、中四国以東と同様に下げ核化した下げ核体系であるとみる。談話音声資料は、いずれも語頭の上昇があり、有核句では核音節まで、無核句では句末まで平進の音調となる点は東京方言と似ている。ただし、句頭音節は語頭核（上昇調）がある場合を除いて低平に聞こえることが多い点や、下げ核の下降が核次音節で止まる点が異なっている。

平子達也(2010)も大分方言を例示しているように、語末核型名詞で無核のノ付き形が規則的なことが知られている方言であるが、談話音声資料では、1音節名詞でも有核語のノ付き形が無核のピッチ形で出現している。より徹底した系統化があったと見られるが、その理由はわからない。なぜ他地域で有核1音節名詞の無核化が起きないのかという問題と共に、今後の解明を俟つ。2-2類と3-4類の名詞はこれらの方言では無核型であるので、有核ノ付き形が出ている場合のみをあげる。

3.6.1. 福岡県岩屋方言

句頭の上昇は変異幅が大きい。句頭が長音節の場合には、上昇調の発話と低平調の発話の両方が聞かれる。核音節が後続の母音や撥音と長音節を構成する場合には、核がこの音節の下降調として実現する。

語末核型のノ付き形には、有核のものと無核のものがある。

(103) a. ギ[シ]ノウエ 「石垣の上」 40_iwaya p100

b. シ[モン]]ホー]マ[ジェー 「下の方まで」 40_iwaya p110

(104) a. ヨ[ノ [ア]ケンウ[チ 「夜の明けないうちに」 40_iwaya p93

b. [[シンダモンノ ホニョー]] 「死んだ者の骨を」 40_iwaya p98

c. シン[ダモンノ ヒ]ジャローカ 「死んだ者の火だろうか」 40_iwaya p99

- | | | |
|---------------|--------|---------------|
| d. ミ[シェンモン]]ガ | 「店の人が」 | 40_iwaya p112 |
| e. ミ[シェンモン]]ニ | 「店の人に」 | 40_iwaya p112 |

3.6.2. 大分県西庄内方言

長音節の下降調や核音節以外の上昇調が避けられる傾向が強い発話が聞かれる。句頭の長音節に核がない場合には低平部が長い。核の次音節が長音節の場合は、この音節の冒頭部で急な下降が実現し、低平になる傾向が強い。語末核のある音節が後続の付属語と融合して語末長音節になった場合には、核が前に移動したり、核による急な下降が後続語の冒頭で実現したりする。

語末核型名詞のノ付き形には、有核のものと無核のものがある。

- | | | |
|-------------------------|-------------|---------------------|
| (105) a. ヨ[メゴ]ワ ウチ]ノ | 「(倒置)うちの嫁は」 | 44_nishishonai p319 |
| b. オ[ナジ イッショー]ン ハタラキナ]ラ | 「一生の仕事なら」 | 44_nishishonai p324 |
| c. イ[エン]ウチ]ガ | 「うちの中が」 | 44_nishishonai p324 |
| d. シ[ゴ]トン シ[ブリ]トカワ | 「仕事のしぶりとかは」 | 44_nishishonai p325 |
| e. ト[ショ]レン [コ]ツナラ | 「年寄りのことだから」 | 44_nishishonai p338 |
| (106) a. ハン[ブンノウエ | 「半分以上」 | 44_nishishonai p314 |
| b. タ[ノナガル]ルヨーナ | 「田の流れるような」 | 44_nishishonai p316 |
| c. ア[タマンツカイカタジャ | 「頭の使い方だ」 | 44_nishishonai p322 |
| d. ト[シヨリンコッ]チャー | 「年寄りのことだから」 | 44_nishishonai p329 |
| e. ミ[シェン]シー | 「店の人に」 | 44_nishishonai p334 |

(105)c は、「イエ* 家」の核が[エン]の後で実現している例、(106)e は、「シ* 衆」の核が前に移っている例と判断した。

3.6.3. 大分県上野方言

この談話音声資料では、長音節に核がある場合には下降調も聞かれる。また、核の前まで平進ではなく緩やかに上昇し、核音節まで上昇させて際立たせる発話も現れている。

語末核型のノ付き形の出現例には、有核のものと無核のものがある。なお、この談話音声資料では2-2類の「ヒト 人」が語末核型で発話されている。

- | | | |
|-------------------------|------------|--------------|
| (106) ヒ[トン]] ヨ[メニイッ[タ]リ | 「人の嫁に行ったり」 | 44_ueno p350 |
| (107) a. ジュー[ハチノオリ | 「18の折に」 | 44_ueno p343 |
| b. [[タイノミギリオ | 「鯛のむしり身を」 | 44_ueno p344 |
| c. コ[ダランウイ | 「小皿の上に」 | 44_ueno p344 |

d. ヒ[トンカ]ナイニ [ナ]リャー	「人の家内になれば」	44_ueno p349
e. オ[ヤノ ヤル [サ]キャ	「親のやる先は」	44_ueno p355
f. タ[ノ]ナケ	「田の中に」	44_ueno p358
g. ウ[マンク]ツ	「馬の靴」	44_ueno p360

(107)a は、この語がこの方言で語末核であるかが未確認である。(107)c の「コザラ 小皿」は、次末核の出現例がある。(107)f の下降の理由はわからない。

3.7. 東北の外輪式諸方言

以下の諸地点の談話音声資料を分析した。

15_asahi	新潟県岩船郡朝日村高根（現村上市）
06_kurokawa	山形県東田川郡黒川村（現鶴岡市）
05_futsunai	秋田県南秋田郡富津内村（現五城目町）
02_kuroishi	青森県南津軽郡黒石町（現黒石市）
02_gonohe	青森県三戸郡五戸町
03_miyako	岩手県宮古市高浜
03_sakurakawa	岩手県胆沢郡佐倉河村（現奥州市水沢）

外輪式方言は、名詞の類別所属による類型であるが、その中で上昇タイプの核をもち、核の後の下降が任意となる諸体系のデータを分析する。拙論では、ピッチアクセント祖体系の上げ核が、3.1.~3.6.の降り核化を経ないで昇り核に移行したと見る諸体系である。昇り核体系として分析する場合、核の後の上昇が認められないならば核音節で上昇が完結する昇り核体系ということになる。

これらの談話音声資料で問題となるのは、「ヤマ[サ 山へ]」のような、名詞単独では末音節が上昇する語末核型の名詞に母音の広い助詞が後続する場合に、助詞が高いことである。拙論ではこれを、これらの体系が祖体系において上げ核だったことの痕跡と見るが、共時的には、この語末核を「核音節で上昇がはじまる昇り核」と解釈すべきか、次音節の母音が高い場合に「次音節で上昇が終わる上げ核」でかつて生じた音形が（部分的に）残存していると解釈すべきか⁵という問題が残る。後者の解釈が必要になるのは、本来の次末核型で語末母音が高い場合が本来の語末核型と（音韻論的には）弁別がない場合である。この

⁵ 通時的な解釈について、後続音節の母音が高い場合に「下がり目」が一つ後ろに下がって型が分裂した、とする分析が多いが、上昇核体系において「下がり目」は弁別的ではない、というのが拙論の立場であり、後続母音が高い場合に下降開始が早まるのは音声的な現象であると考え。母音が高い場合の変化で型が分裂したことの検証には、下降が遅いことにより上昇開始も遅くなっている、ということのほうが重要である。

ような体系は、上野(1984)の村上方言をはじめ、日本海側の方言に多く報告されている。

※

どちらの解釈が適当であるかは個別の体系ごとに検討しなければならない。児玉(2018)は大鳥方言について談話音声資料の分析に基づいて「核音節で上昇がはじまる昇り核」とする仮説を提示したが、これも最終的な検証が必要である。本稿の談話音声資料の分析では、母音の広い助詞であるノが接続する語末核型のノ付き形についての個々の談話音声資料の観察を提示するにとどめる。

無核型は名詞側で上昇のない低平を基本とする体系が多いが、朝日高根方言・黒川方言や宮古方言のように、語頭側で核とは弁別可能な「高」が現れる体系がある。

これらの方言でも九州の外輪式方言と同じく 2-2 類と 3-4 類の名詞は無核型であるので、一般助詞付き形で有核の音形が観察される場合を除き、有核ノ付き形が出ている場合のみをあげる。

3.7.1. 新潟県朝日高根方言

1 節で論じた山形県大鳥方言と似た、語頭部が任意に卓立する語が主として無核型に現れる談話音声資料である。語頭の卓立は 2 拍が目立つが、同じ語でも 1 拍の場合もある。同じ語が卓立のない平進の音調である場合も多い。卓立のない無核型は、全体が高平調になる場合もあるので、低平というよりは単なる平進と分析すべきであろう。一方、核は昇り核であるが、核の上昇の後、任意に下降が現れる。下降の開始は次音節の母音が狭い場合に早い。この分析は、児玉(2018)の山形県大鳥方言の分析とほぼ同じである。

語頭核と無核語は、語頭核音節がほぼ上昇調であるのに対して無核語の語頭音節は特に 1 音節の卓立の場合に平進となることのほか、語頭核音節に続き下降がある場合にはこの下降が複数の音節にわたり下降が続くのに対し、無核語の語頭卓立の後には、ピッチの段差的な急下降の後、ほぼ平進となる、という特徴によっても区別しうる。

この方言で語末核型と分類したのは、次末音節までが低平となるものである。次末音節で上昇調であれば、末音節が「高」に聞こえる場合でも、下降が起きないかあるいはその開始が遅い場合であると判断して次末核型とみなす。この方言についても、語例の["や"]は聴覚的な高低差を表記し、昇り核の位置は"*"で示す。

この方言では、語末核型の名詞に母音の広い 1 音節助詞が接続した場合に、同じ名詞で助詞の高接・低接両様の語例がある。(例「コ[[メ*]モ 米も(p390)」「コ[[メ*ガ 米が(p390)」)

語末核型と判断した語のノ付き形では、無核形の出現例が見当たらなかった。

(108) a. [[ジュ*ー [ゴ]ネンノ ト[[キ*]ノ 「15 年の時の」 15_asahi p393

b. カンジェ*[ノ アノ カ[[カ*]ナン]ザ

「鍛冶屋のあのかみさんなんかは」 15_asahi p396

c. アズラエ*[ノ [コー]デキテ 「頼んだものを買って来て」 15_asahi p409

(108)c は準対言用法のノ付き形である。

一方、(109)は無核とみられる語のノ付き形が、語末核型のノ付き形と同じアクセントで現れている有核化の例である。

(109) [イダ]バノ ウ[[エ]ノ 「床の上の」 15_asahi p394

3.7.2. 山形県黒川方言

1 拍または 2 拍の語頭の非下降の卓立が聞かれる談話音声資料である。長い語では有核型でこの卓立はある語例も出る。2 拍語では 1 拍の卓立だと考えられる。核の後の任意の下降は必ずしも持続していない。語末核の次音節の助詞は高く聞こえる場合と下降が開始している場合があるが、下降しない場合でも語末音節からの上昇がはっきり聞き取れる場合が多く、核音節で上昇を開始する昇り核の実現としての上昇であることが明確である。

語末核型のノ付き形は、ミニマルペアを含め、有核・無核の両方が出る。

(110) a. メ[[シ*]ノ ワンサ[カ*ジ]ギデ 「飯の椀の盃で」 06_kurokawa p243

b. ン[[ネー*]ノ サンゴヌ[エ*]スデ ネーヤ
「娘の産後ですからね」 06_kurokawa p249

(111) a. [メシ]ノ ワンサ[カ*ジ]ギデ 「飯の椀の盃で」 06_kurokawa p242

(110)の「ンネー 若い女性」は語頭の低平調が聞き取りにくい、他の出現例(p241)から語末核型と判断した。

3.7.3. 秋田県富津内方言

音節配列に特徴のある談話音声資料である。いわゆる長音節と短音節が長さの対立を失って等時的に配列される。おそらくこれと関係すると思われるのが、曲調がほとんど目立たないということと、句内の音節再編が起きやすいということである。

無核型は低平調であるが、句末では文節末の拍が少し高い。有核句でも核の前は低平調であり核音節で大きく上昇する。無核型の句末上昇と核の句末の核との弁別が上昇の幅だけで可能かどうかはこの談話音声資料だけでは判断できない。低い語頭音節に続く高い音節の母音が広い場合に語頭核に由来するものとそうでないものの弁別があるかどうかや、助詞側に上昇がある場合に語末核が昇り核として実現しているといえるのかも判断がつかない。

核の後の下降は句末以外では観察されず文節末まで高平が続くことが多いが、句末でな

い語頭核の文節は後続文節の前で文節末が1拍低くなる。句末文節の核の後の下降の幅は核の上昇と比べるとこの談話音声資料では小さい。

語末核型のノ付き形は有核・無核の両方が出る。

(112) ソノ ゴッ[ペ*]ノ 「その頂上の」 05_futsunai p177

(113) a. オ[ニ*] イテ オニノア[ナ*] ア*ルッテ
「鬼がいて鬼の穴があるって」 05_futsunai p176

b. タコノナ[カ*]サ 「田の中に」 05_futsunai p185

c. エノ[ホ*]ダ 「家の方は」 05_futsunai p202

(113)bの「タコ 田」は他の出現例(p184,p185)はすべて語末核型である。

(114) a. エ[ノ*]シロ 「家の後ろを」 05_futsunai p184

b. ソノ イェー[ノ*]シロ 「家の後ろを」 05_futsunai p184

(114)a-bはノの上昇が「イエ 家」の語末核によるものか「ウシロ 後ろ」の語頭核によるものかの判断がつかない。ノ付き形でノの前に核が現れている例も1例ある。

(115) ムカシカ[ラ*]ノ 「昔からの」 05_futsunai p181

3.7.4. 青森県黒石方言

曲調が目立たないという点は秋田県富津内の談話音声資料と同じであるが、文節末の長音節が長く発音されるときは、文節間の下降上昇が先行して現れると思われる曲調が聞かれることがある。無核文節は句末でない場合にも比較的是っきりした文節末の上昇がある。句頭の有核文節は核の前の低平部が低く抑えられて核の上昇が無核型の文節末上昇と区別できる発話が多い。しかし、句頭以外の位置の文節頭の下げ幅は句頭よりずっと小さく、核による上昇の幅も小さくなる。

語末核型のノ付き形は有核のもののみである。祖形の語末核に由来する語末核名詞で語末音節ではなく助詞が高い語例「ヤマサ 山へ(p35)」が出るが、ノ付き形には2-3類や3-4類の例がなく、無核型とこの助詞に核が実現する型の弁別があるのかどうかは未確認である。

(116) a. ムガシ[ノ]オドリド エ[マ*ノ]オドリド 「昔の踊りと今の踊り」 02_kuroishi p25

b. オキウ[ラ*ノ] ユコモ 「沖浦の温泉も」 02_kuroishi p31

c. オ[エ*ノ] オ[ド*チャ] 「うちの主人は」 02_kuroishi p38

3.7.5. 青森県五戸方言

短い音節でも曲調が聞き取りやすい談話音声資料である。無核型の文節末は上がりきら

ない軽い上昇調となる。この上昇は、後続文節が語頭核をもつときは現れない。核は、先行音節の低平から急に上昇して緩やかな下降に転じているとみられ、核の次音節はやや低く聞こえることが多い。語末核型の名詞に助詞が高接して有核に聞こえる例は見つけれなかった。有核型の名詞に接尾辞コがついた語形は語末核型で現れているが、これらの語に助詞が接続する際は、助詞への核の移動は観察されない。また、語頭核形には、「イマ 今 (p75)」のように核の次音節の母音が広い場合も含まれている。昇り核体系として解釈に問題のある例はない。

語末核型のノ付き形は有核・無核の両方が出る。

- | | | | | | |
|----------|--------|------------|------------|---------------|---------------|
| (117) a. | ヨ[ソ*]ノ | [タ*サ イ[[テ | 「よその田に行って」 | 02_gonohe p57 | |
| | b. | モモノ[キ*]ノ | [ハ*]シ | 「ももの木の箸」 | 02_gonohe p59 |
| | c. | アッ[チ*ノ | [オ*クノ ホ*]サ | 「あっちの奥の方へ」 | 02_gonohe p79 |
| (118) a. | エノ[ホ*ノ | [ツ*ゴワ | 「家のほうの都合は」 | 02_gonohe p73 | |
| | b. | エノ [ツ*..ゴワ | 「家の都合は」 | 02_gonohe p74 | |

(117)aの「ヨソ よそ」は、東京方言で例外的な無核形ノ付き形をもたない語末核型名詞であるが、同様な名詞である「ツギ 次」は無核型の出現例がある。

- | | | | |
|-------|----------|--------|---------------|
| (119) | ツギノアサ[マサ | 「次の朝に」 | 02_gonohe p64 |
|-------|----------|--------|---------------|

全体に平進であり、複合語とも解釈できそうな音形である。一方、九州の外輪方言で無核ノ付き形をもつ1音節有核型名詞は、ノ付き形の出現例がいずれも有核型である。

- | | | | | |
|----------|--------|---------|----------------|---------------|
| (120) a. | [シ*ンノ] | イチ[ゲ*ツサ | 「新の一月に」 | 02_gonohe p63 |
| | b. | [タ*ノ] | へ[ケ*ホリダチシケネ | |
| | | | 「田のせき掘りだそうだから」 | 02_gonohe p68 |
| | b. | [タ*ノホ]ア | 「田の方は」 | 02_gonohe p69 |

3.7.5. 岩手県宮古方言

句頭では、無核語や有核語の昇り核に先行する部分のように、非句頭で低平が予想される部分に語頭の卓立が観察される方言である。卓立の長さは1拍から3拍到及ぶ。2拍の場合、長音節であれば下降調に聞こえる例もあるが、2短音節であれば2音節目にかけてピッチが少し上がるものが多い。核が後続する場合だけでなく、無核型も五戸の談話音声資料と同様に、文節末音節も上昇するため、重起伏的に聞こえる発話が多い。核は、次音節の母音に関わりなく昇り核として実現するが、次文節が後続する場合にも核の上昇の後が下降調となるようである。ただし、この下降は次音節ではまだ緩く、核の上昇の後2音節が高く聞こえることもある。

語末核型のノ付き形は有核・無核の両方が出る。

- (121) a. [アノ]ト[キ*]ノ ツナミワ 「あの時の津波は」 03_miyako p90
 b. [カンズ]ルー[ヤ*ノ [シ*]タツァー
 は」 03_miyako p92 「勘次郎屋の人たち
- (122) a. [イ]モ[ノ [アブ]ラ[ゲ]ト*カ 「芋の油揚げとか」 03_miyako p82f
 b. オラガ [イエー][ノ オ[ズィーサマ]]

「私の家のおじいさんが」 03_miyako p89

有核 1 音節語のノ付き形出現例はいずれも有核である。

- (123) a. [タ*ノ]クサ[ト*]リ[[デー 「田の草取りで」 03_miyako p97
 b. [ユ*ノホ*ー]ニ 「風呂のほうに」 03_miyako p104

3.7.6. 岩手県佐倉河方言

無核型が、句末 1 音節の上昇が現れる場合を除き、ほぼ平進で現れる談話音声資料である。核の前もほぼ平進で、核による上昇の後、句内で次文節が後続する場合にも下降することがあるが、その下降は核の上昇の前の「低」より下降することはほぼない緩やかな下降である。句頭 1 拍の卓立が数例ある。

「ヤマサ 山に(p112)」「ワキサ よそに(p128)」のように、助詞に上昇が現れる上げ核的な語形も出現するが、このような形態論的な違いを除くと、これらの語形をもつ祖体系からの語末核型 2 音節語と、次音節に広い母音をもつことを条件に語頭核が昇り核化しないで分岐したと拙論では考える、祖体系の語頭核型 2 音節語に対応する型は、いずれも語頭音節が低平であり、音韻論的に弁別すべき特徴は観察されない。「エマ[ナダ 今なんか(p114)」のように、1 例であるが、後者の型の語で上げ核的な助詞で上昇する実現形が出ている例もあり、あるいは形態面でも合流が進んでいるのかもしれない。そうであれば、気仙沼など宮城県北部のアクセント体系とも似た改新であると考えられる。

ノ付き形の出現例ではこのような合流の例は見られず、無核ノ付き形の出現例は祖体系からの語末核型に限られる。なお、『全国方言資料』の転写(p116 11)では「モトノ」となっている語は、音声資料では「モトモトノ」という無核の発話に聞こえる。

- (124) a. イ[マ*ノ]] ヒ[タ*タ 「今の人たちは」 03_sakurakawa p116
 b. シェ]シヨ[エ*ノ ガ[ガ]ト 「清正の家の母さんと」 03_sakurakawa p117
 c. [*メノエ]サ 「前の家に」 03_sakurakawa p119
- (125) a. コ]メノメスクダ[ケ]デ 「米のご飯を食べるだけで」 03_sakurakawa p113
 b. マメノゴ[ナ*] カミコサ ツ[ツ*ンデ

「豆の粉を紙に包んで」 03_sakurakawa p118

c. ワキノバン[バ]ドサ⁶ 「よそのばあさんのところに」 03_sakurakawa p128

4. まとめと考察

3 節で示した方言談話音声資料からのノ付き形の分布には、中部から関東に広がる地域の資料が欠けているが、語末核型（あるいは中央式と垂井式周辺・佐渡の次末核型）のノ付き形として、無核型と有核型が全国に幅広く分布していることは、以上のサンプル調査からも明らかである。いくつかの観点から結果と課題について考察する。

4.1. 無核ノ付き形の分布

外輪式体系に有核型名詞の無核ノ付き形があること自体は先行研究において既知のことであり、その点に関しては特筆すべきことはない。興味を引く点は、1 音節の有核型名詞(1-3 類)が核を保持しているにも関わらず、ノ付き形では無核型が出現しているのが、九州の3地点に限ることである。この無核ノ付き形が改新であるのか、継承であるのかは検討されるべきことのひとつであると考える。

(4)の名義抄式体系との関連で問題になる2-2 類の無核ノ付き形は、内輪・中輪・中央式での分布が問題となる形式であり、内輪・中輪式が西日本にはほぼ限られている本稿の調査では不十分とはいえ、山口県や能登半島といったこの地域の周辺部の離れた地域で出現例があり、また周辺部に近い東京方言で継承形とみられる広範な使用が認められることは、これらのノ付き形がピッチアクセント祖体系からの継承であるという2節の仮説を否定しないものである。

これに対して、類推的变化の存在を実証するデータとして、低起有核の名詞のノ付き形が無核型で出ている例が2例、福井県と三重県に出ている。中央式と垂井式周辺にのみ関わることであるが、検討に値すると考える。

4.2. 有核ノ付き形の分布

多くの地点で語末核型の名詞について無核ノ付き形と共に有核ノ付き形の出現例があるが、問題はその中身である。2-3 類名詞での有核ノ付き形についても有核ノ付き形が出る談話音声資料は、中央式と周辺が多い印象がある。全般に無核ノ付き形より有核ノ付き形の出現が多いことで目立つのが富山と広島の話音声資料である。富山については、有核ノ付き形のみを継承した2-5 類が語末核型として継承されたことが大きいと思われる。広

⁶ 転写では「ドオンサ」であるが、音声資料には「オン」に当たる部分がない。この談話音声資料は全般に音質がよくないが、あるいは切れているかもしれない。

島の場合は、富山や中央式中央部あるいは東北のような、無核ノ付き形をもたない型との合流による説明は難しいと思われる。

(4)の名義抄式体系との関連で関心があったのは、外輪式を除く諸体系について、特に名詞単独の場合、2-2類と2-3類（あるいは3-2類と3-4）の間で有核ノ付き形の出やすさに差があるかどうか、ということであった。しかし、資料の性質上、そもそも出現例が少ないため、全体的な傾向としてどちらが多いということとはできない。この点は、東京方言のように、類には関わりなく単独形では有核ノ付き形が出にくい、という極端な例から、語による差がありその中に類ごとの傾向が見られる、といった、各体系個別の精密な調査が必要になると思われる。これは、無核ノ付き形がピッチアクセント祖体系に由来する、という4.1.の結論を前提として、それから(4)の名義抄式体系が経たであろう改新をどの体系が共通して経たのか、という問題に関わる。(4)を経た体系であれば、2-2類の規則的な有核ノ付き形を継承していると考えられるからである。

有核ノ付き形の中には、時間・場所の名詞や副詞のノ付き形で有核形が出やすいという傾向は、東京方言や京阪方言には限らないようである。これも祖体系から継承された特徴ではあるが、形態論というよりは構文論に関わる問題であるかもしれない。

4.3. 談話音声資料を用いた体系の分析

談話音声資料の聞き取りにより語末核形と無核形の語を選び出す、という作業の性質上、全体のアクセント体系の（予備的な）分析が必要な作業を、ピッチアクセント体系に限るとはいえ、多くの体系について行った。

あらためて確認したのは、日本語諸方言のアクセント体系で、特に「無核」の音形がもつ多様な実現のあり方である。比較的距離に近い体系間で、無核型の実現のしかたが大きく異なる、ということの認識は重要であると思われる。川上(2000)が看破したように、無核型というのはトーンにはよかならず、トーンは全体の音形によって型の弁別を保つのである。式体系ではトーン自体の弁別のために、変異の幅にはおのずと制約があるが、有核型との弁別だけが必要な位置アクセント体系では、音声的实现の幅は非常に大きくなる。このため、変化も起きやすく、地理的な距離にかかわらず様相の異なる無核形が発生するものと思われる。

特に注目するのは、東北外輪式、四国中輪式、中央式とその周辺、佐渡を含むさまざまな地点の談話音声資料で観察される語頭の卓立が、いずれもよく似たピッチ形を持っていることである。白峰方言の談話音声資料で観察される「下降式」も、下降の後、非下降に平進するピッチ形の点でこれらの卓立形によく似ている。白峰方言の「下降式」は、周辺

の北陸の諸方言のアクセント変化にも大きく関わっていると見られ、音韻論的に有意味なピッチ形であることは明らかで、位置の固定している点は、他の核とは異なるピッチ下降を実現する別の核（「非下降核？」）という解釈も可能ではないかと思われる。これに対して、談話音声資料で観察される語頭の卓立は音声的実現の変異というべき任意の出現であり、同一視できないのは明らかである。しかし、祖体系の語頭核が式的な実現に変化し、本来の無核型との対立がある体系では、この卓立が起きているのはほぼ本来の無核型のほうである。

山口(2003: 234)は、熊野・尾鷲の 2-1 類の卓立をもつ変異形について、「(音韻論的に有意味な) 下降はせず、上昇はどこか或いはどこでもする型」として上昇も下降もしない 2-4 類との弁別を保つ、とする解釈を可能性のひとつとして提案している。これは上昇に着目した記述であるが、下降としてみると、平進 2 タイプの弁別として、高平調の全体を高平調に保つ代わりに、平進は維持しながら部分的にピッチを下げた体系、とも見える。

この分析に立てば、これと似たピッチ形をもつ白峰方言の下降式も、高平調の音声的変異形が音韻論的に有意味になる改新を経たという可能性を否定できないのではないかと考える。児玉(2017)では、上げ核体系の無核型は非上昇であれば平進でも下降でもよいはずだ、という論拠で上野(1988, 2006)の祖体系無核型の下降式での再建に異を唱えたが、積極的に平進式を再建する仮説も立てられるかもしれない。本稿の対象外ではあるが、隠岐の三型体系のようなトーン対立の体系でも同様の任意の卓立が観察されることも、この現象のトーン弁別との関わりをうかがわせる。

もう一方の「核」の実現については、いくつか考えを改めなければならないように思う。児玉(2018)は、ピッチアクセント体系の通時的変化について、核の位置が移動するのではなく、核が位置を保ったまま、その実現する上昇あるいは下降のタイプが、核音節で完結、核音節で開始、次音節で完結、次音節で開始、というように、変異幅に重なりを持ちながらその弁別特徴が変わっていく、というモデルを提案した。その前提となっているのは、核はどの位置にあっても共通の実現形をもつ、ということである。

しかし、児玉(2015)では、隠岐の 3 型アクセントの成立について、降り核化とその再解釈によって生じた下げ核について、語頭核の実現する下降が核の後に低平調を実現するの（下降完結タイプ）に対し、語中核は次音節以降も下降が持続する（下降開始タイプ）という音調の違いが本来の下降式無核を合わせての 2 種類の下降トーン合流につながったという、位置による核の実現の違いがあることを前提とする立論を行なった。

本稿のために分析した体系は、拙論で祖体系の語頭核が変質したと説明したものが多く、

「語頭核が核としての性質を部分的に残している」というような説明を多用したが、これは、核の実現に関わる性質は、本来位置を問わず同じであるはずである、という立場からの議論である。しかし、多くの談話音声資料の核の実現を観察してみると、語頭核とそれ以外の位置の下降核で実現の仕方が異なるのではないかと疑われる体系もある。本稿は語末核を問題にした体系解釈の予備的研究であるので、ここでの指摘にとどめるが、この点については、今後あらためて考えてみなければならないと思う。

参考文献

- 上野善道(1983) "Japanese Dialect — the Geographical Distribution of Japanese Accents." In S.A.Wurm & Sh. Hattori (eds.) *Language Atlas of the Pacific Area, Part II*. Canberra: Australian Academy of the Humanities in collaboration with the Japan Academy.
- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇).明治書院. 347-390.
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 上野善道(1993)「山形県大鳥方言の類別体系」『金沢大学日本海域研究所報告』25.161-183.
- 上野善道(2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130.1-42.
- 川上夔(1965)「平安アクセントと補忘記アクセント」『国語国文』34-2.63-78.
- 川上夔(1997)「高さアクセントの記述一段,向き,契機,核など」『音声研究』1(2).20-27.
- 川上夔(2000)「日本語アクセントのトーン性」『音声研究』4(3).28-31.
- 金田一春彦(2005a)「熊野灘沿岸諸方言のアクセント」『金田一春彦著作集第7巻』東京: 玉川大学出版部(初出 1959『名古屋大学10周年記念論文集』及び『三重県方言』9) .
- 金田一春彦(2005b)「佐渡アクセントの系統」『金田一春彦著作集第7巻』東京: 玉川大学出版部(初出 1964 九学会連合佐渡調査委員会編『佐渡—自然・文化・社会』) .
- 金田一春彦(2005c)「音韻変化からアクセント変化へ」『金田一春彦著作集第7巻』東京: 玉川大学出版部(初出 1971『金田一博士米寿記念論集』三省堂) .
- 児玉望(2015)「隠岐3型アクセントの再検討」『熊本大学言語学論集』14.1-36.
- 児玉望(2017)「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ熊本大学言語学論集』16.1-34.
- 児玉望(2018)「東北地方の二つの方言の韻律分析—「アクセント核はどこから来たか」補説」『ありあけ熊本大学言語学論集』17.27-52.

- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』東京:勉誠出版.
- 新田哲夫(1985)「石川県白峰方言のアクセント体系」『金沢大学文学部論叢文学科篇』
5.97-116,
- 新田哲夫(2004)「NHK 全国方言資料(石川県石川郡白峰村白峰)改訂と注釈」『金沢大学文学
部論叢文学科篇』 24.29-63.
- 新田哲夫(2005)「NHK 全国方言資料 (石川県石川郡白峰村白峰) 改定と注釈 (承前)」『金
沢大学文学部論叢言語・文学篇』 25. 123 – 154,
- 服部四郎(1931)「国語諸方言のアクセント概観(1)」『方言』 1-1.11-33.
- 服部四郎(1954)「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』 2. 2-50.
- 早田輝洋(2017)『上代日本語の音韻』東京:岩波書店.
- 平子達也(2012)「ラムゼイ説と日本語アクセント史研究の諸問題 : de Boer (2010)の書評」
『音声研究』 16-1.16-29.
- 広戸惇・大原孝道(1953)『山陰地方のアクセント』報光社.
- ポリワール(1976)『日本語研究』(村山七郎訳)弘文堂.
- 松倉昂平(2014)「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』 35. 141-154.
- 山口幸洋(2003)「三重県南牟婁郡のアクセント」『日本語東京アクセントの成立』鎌倉:港
の人 (初出 1971『国語研究』 32)
- 日本放送協会編(1999)『CD-ROM 版 全国方言資料』

言語学研究室だより

本年度は卒業論文が1本です。

[卒業論文]

- ・アイヌ語カラフト方言民話資料における接続詞を用いた時間の進行について

植松 由貴

[在籍者数]

2019年3月1日現在4名（教員1名、学部2名、大学院修士課程1名）

あとがき

熊本大学「言語学研究室」発行を名のることができる最後の論集になると前号のこの欄でお伝えしましたが、今年度の入学者が卒業するまでは言語学履修モデルの科目を提供しなければなりませんので、あと3年間は言語学研究室宛の交換雑誌を受け取ります。同時進行で、2019年度の入学者が現代文化資源学コースに進学する2020年度から、コミュニケーション情報学科現代文化資源学コース言語資源論研究室を名乗る方向で調整中です。

来年度も学長貸与ポストを獲得できませんでしたので、大学院のコース新設を絡めて学部として戦略会議にその強化のための貸与要求はするのですが、成算はありませんし、取れた場合でも日本語学・対照言語学関連の縛りのある教員構成になるものと思います。

この『ありあけ』の将来ですが、新コース設置と教員配置の移動に伴ってさまざまな事情が変わりますので、言語学の研究誌として存続することは難しいかもしれません。方言学や危機言語学、フィールドリサーチで収集した言語資料を含むアーカイブ化された文字・音声・映像の活用といった分野の研究誌として、児玉が在職する間は刊行を続けたいと考えております。今秋ごろにはホームページでご案内しますので、今しばらくお待ちください。

熊本大学言語学論集「ありあけ」投稿規定 Ver. 1.2

(来年度刊行する場合は、改めてお知らせしますが、ご参考までに。)

- ・締め切り：1月末日
- ・個別言語の言語学的研究に関する投稿を歓迎します。
- ・採否は、熊本大学言語学研究室で決定します。
- ・投稿は完全版下原稿とします。

用紙 A4 (印刷時に B5 版になります。)
マージン 上と左右 28 ミリ程度 下 30 ミリ程度
用紙設定 40 字／行 31 行 (程度) ／ページ (本文・注とも)
活字 題目およびその欧文訳 15 ポイント

本文 10.5 ポイント

注 9 ポイント

ページ 版下右下に鉛筆で記入 (印刷しない)

欧文要旨・キーワード 自由 (希望の場合は、標題の下あるいは注の後に)

(既刊のものを参考にしてください。)

- 投稿原稿は返却しません。
- 特に長さの制限はありませんが、長文の場合は投稿の前に連絡して了承を得てください。
- URL : <http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/misc.html#ariake> への掲載許諾をお願いします。
- 熊本大学レポジトリへの掲載許諾をお願いします。

[言語学研究室連絡先]

郵便番号：860-8555

熊本市中央区黒髪 2-40-1 熊本大学文学部

電話/ファックス：096-342-2458 (文学科研究事務室)

電子メール：kodama (_at_) kumamoto-u.ac.jp